

連歌師能順年譜稿 下

伊藤伸江

本稿は、「愛知県立大学文字文化財研究所紀要」第六号に掲載した「連歌師能順年譜稿 上」に続く、年譜の後半部分である。元禄六年以降の年譜と年時不明の作品をおさめた。前稿を合わせて参照されたい。

本年譜作成にあたり、奥田勲氏との科研費共同研究、討議から多くの示唆を得たことを記し、お礼申し上げます。

本稿は「JSPS科研費」PI7K02421「独吟百韻分析による宗祇連歌の多面的新研究」の助成を受けたものである。

能順年譜凡例

年譜引用文献・資料と略号一覧

年譜引用にあたり略号を用いた場合には、それを示した。論文では頭に、他は末尾に示す。

また、「連歌総目録」、「新編国歌大観」CD-ROM、「新編私家集大

成」CD-ROMを参照、反映している。

【柵町知彌氏関係資料・論文】（副題は略したものがあ。また、題は初出時のものとする。）

- ① 「北野社古記録（文学・芸能記事）抄（一）」
〔有明工業高等専門学校紀要〕4号・1968.12）
〔近世文芸資料と考証〕9号・1974.2）
- ② 「能順伝資料・その二（預坊時代・前）」
〔有明工業高等専門学校紀要〕11号・1975.1）
- ③ 「能順伝資料・その三（預坊時代・後）」
〔有明工業高等専門学校紀要〕12号・1976.1）
- ④ 「能順伝資料・その四 宗因点『延宝五年仲秋 北野三吟連歌』」
〔近世文芸資料と考証〕10号・1978.2）
- ④ 「加能連歌壇史藁草・その一」〔白山万句―資料と研究―〕
（昭和60・白山本舎 加賀一ノ宮 白山比咩神社）

⑤「資料紹介 能順時代人の連歌史観・参考資料」

〔連歌研究の展開〕（昭和60・勉誠社）

⑤「加能連歌壇史藁草・その二（前）―能順伝資料・その五―」

〔国文学研究資料館紀要〕11号 昭和60・3

※⑤末尾の翻刻「天和三年より能順発句書留」は、⑦に「能順自筆発句書留」として再度編集後再録、引用は⑦によることとする。

⑥「加能連歌壇史藁草・その二（中）―能順伝資料・その八―」

〔国文学研究資料館紀要〕13号 昭和62・3

⑦「加能連歌壇史藁草・その二（後）―能順伝資料・その十一―」

〔国文学研究資料館紀要〕15号 平成元・3

※⑦に納められた能順筆「おほゑ」に関しては、棚町氏の推定に従い、作者は能順ではないと見る。内容に関係する能舜の没年も棚町氏に従い寛永十九年としておく。

⑧「北野宮仕（中）という歌学専門職集団の組織と運営の実態（資料編）」〔社家文事の地域史〕（2005・思文閣出版）

⑨「霊元院と能順」〔小松天満宮だより〕第四号・1988.4

【綿拔豊昭氏関係論文】

①「新出の能順書簡について」

〔加南地方史研究〕第65号（平成30・4）

②「小松天満宮連歌関係書目録稿」〔連歌俳諧研究〕第85号・1993

（能順関係のものは、連歌集に収録されるもの以外は省略との由）

③「小松天満宮宝物館竣工記念奉納 小松天満宮と能順」

（2016・小松天満宮社務所）

④「越中の連歌」（1992・桂書房）

⑤「松尾芭蕉とその門流―加賀小松の場合―」

（2008・筑波大学出版会）

⑥「近世武家社会と連歌」（2019・勉誠出版）

【その他諸氏論文等】

A 桂井未翁「能順遺愛の連歌文書」

〔連歌と俳諧〕第二卷第三号・昭和12・8

B 宗政五十緒「連歌師能順の周辺―『近世畸人伝』私記―」

〔「あけぼの」7巻5号・1974〕

C 柳瀬万里「能順と小松天満宮」〔「あけぼの」9巻5号・1976.10〕

D 北野勝次「小松に於ける能順」

〔加南地方史研究〕48号・2001.2

E 尾崎千佳「能順と宗因―西山宗因全集発刊を記念して―」

〔小松天満宮だより〕第21号・平成17・8

G 竹内秀雄「天満宮」〔昭和43・吉川弘文館〕

H 島津忠夫「宗祇の顔」（2011・和泉書院）

I 福井久蔵「連歌の史的研究前編」〔昭和五・成美堂書店〕

丁 同 『連歌の史的研究後編』(昭和六・成美堂書店)

イ 井本農一 「宗祇肖柏宗長三吟 宗祇独吟 能順独吟 一冊」

〔実践女子大学文芸資料研究所年報〕2・1983(3)

鉄 小林健二 「鉄心斎文庫総目録稿」

〔国文研共同研究成果報告〕・2019.3)

【図録・史料・全集等】展示史料に関しては、図録名の後に番号を示す。

〔加賀前田家と北野天満宮〕

(令和元年度秋季特別展・2019・石川県立歴史博物館) 石歴展

〔北野天満宮 信仰と名宝 天神さんの源流〕

(2019・京都文化博物館) 京文展

『北野社家日記 第四』(1973・統群書類従完成会) 社家四

『北野社家日記 第五』(1973・統群書類従完成会) 社家五

『北野社家日記 第六』(1973・統群書類従完成会) 社家六

『北野天満宮史料 宮仕記録』(1981・北野天満宮史料刊行会) 宮正

『北野天満宮史料 宮仕記録 統一』

(1986・北野天満宮史料刊行会) 宮一

『北野天満宮史料 宮仕記録 統一』

(1997・北野天満宮史料刊行会) 宮二

『北野天満宮史料 宮仕記録 統一』

(1999・北野天満宮史料刊行会) 宮三

『学堂記録下書』

(北野社家記録(東大史料編纂所写真帳 請求記号6112-93))

〔加賀藩史料〕

(1981・清文堂出版、東大史料編纂所データベースに収録) 加藩史

『新修小松市史 資料編7』(2006) 松史資7

『小松天満宮誌』(1982・小松天満宮)

『西山宗因全集』第四卷(2006・八木書店) 西四

『寛永廿一年誹諧千句』

(1982・西日本国語国文学会翻刻双書刊行会) 寛

【所蔵者と史料の略号】

所蔵者(図書館、文庫等)及び、そこに所蔵されている作品。※はその右の所蔵者にかかる所蔵品である。所蔵品のうち類出のものに關しては、煩瑣を避けるため略号を使用しそれを示す。また、翻刻されているものは、翻刻論文を示した。

富山市立図書館山田孝雄文庫…山

※『北野能順連歌并連歌合』…山北

石川県立歴史博物館…石歴

金沢市立図書館：金

※『松雲公最終遺編類纂』：金松雲 ④⑤翻刻

※寛文四年五月吉日夢想連歌原懷紙（六九 一九六）

金沢市立玉川図書館近世史料館：史

金沢市立玉川図書館近世史料館藤本文庫：史（藤）

小松天満宮：小

※『快全・能順等百韻連歌集』：快能 ④⑤⑥⑦翻刻

※『能順自筆発句書留』：書留 ⑦翻刻

※『能順・快全・欲生等連歌書留』：能快欲書留 ⑤⑥⑦翻刻

※『聯玉集』：聯

※『新梅の雫』翻刻『新修小松市史 資料編7 文芸』

北野天満宮：北

天理図書館：天理

※『連歌集 宗養等百韻外』（れ4230）

阪大含翠堂（土橋）文庫：阪

※『連歌集』（日8・19）：合連（阪） 翻刻⑥

早大伊地知文庫：早

鉄心斎文庫：鉄

国立歴史民族博物館所蔵高松宮本：高

東大史料編纂所北野光乗坊文書：光

年譜

元禄六年（一六九三）六十六歳

一月一日

同

一月三日

二月十日

二月十八日

二月十八日

二月十八日

二月十八日

二月十八日

二月十八日

二月十八日

二月十八日

二月十八日

二月十八日

二月十八日

二月十八日

神前衆中歳旦の披露あり。（宮一）
発句「今朝よりやおもひ初るを花の春」（書留224
⑦、聯13）

裏白連歌あり。（宮一）

学堂前句付あり。（宮一）

「待かひ千句」をなす。能順、第一百韻発句「待
かひの有世なりけり春の花」を詠む。連衆は能

順、元胡、瑞順、日詳、直景、常いら。（史（藤））

『北野千句 待かひ千句』（0968-126）「金沢にて
十花の千句巻頭／待甲斐の有世なりけり春の花」。

（聯164）

能順家には借屋あり。（宮一）

学堂連歌あり。（宮一）

預坊の節の連歌あり。（宮一）

学堂月次連歌あり。（宮一）

『能順自筆発句書留』に発句224～231あり。⑦（作

品は書留の句により、句番号を示しており、『聯玉集』にある句はその後に聯と句番号を添える。

「行人は見さらん花の夕哉」(225)

「花の香に心時めく夜床哉」(226 聯191)

「花を見ありきて／目うつしも花より花の盛哉」

(227 聯150)

「横山外史御内方遠忌／散花は其世なからの別

哉」(228)

「行春を待そまたれそ藤の花」(229 聯275)

「春の色は藤山吹のかきり哉」(230 聯273「藤山ふ

きを」)

「行春に見えん心の色もかな」(231 聯279題「暮

春」)

連歌あり、当人能貨。(宮一)

学堂先日二十三日の連歌の会あり。(宮一)

学堂連歌の会あり。(宮一)

学堂月次連歌の会あり、先月二十三日の延引の会

あり。(宮一)

学堂月次連歌あり。(宮一)

学堂月次連歌あり(今月十七日延引の会)。(宮

六月二十九日

横山筑後追悼の発句をなす。「六月廿九日 身ま
かりし人の悼に／露の世は秋より先のあはれか
な」(聯玉集508、書留252「横山筑後悼」)

夏

「能順自筆発句書留」に発句232、248あり。⑦
「本多政在／たをやかに露そか、れる若楓」(232

聯311)

「忍音やしのへとてしも郭公」(233 聯323)

「坂倉善助／打乱篠のくまなき螢哉」(234 聯409)

「今枝直方忌中ヲ訪／ぬれくゝていかに日暮す夏

の雨」(235 聯489「今枝直方の忌中に籠らせ給ふ

に」)

「慈雲寺閑居日祥会／夏山は木のもと住の心哉」

(236 聯488「金沢慈雲寺日祥隠居せし会」)

「浅加十郎右衛門一男悼／行螢やみなる空を名残

哉」(237 聯415「悼人のもとへ」)

「直方下屋敷ニ而／夏草の中なる声や松の風」(238

聯486)

「五月雨に降出る空か朝雲」(239 聯381題「五月

雨」)

六月九日
六月十九日

「日祥・元胡三吟／をのつから木の下露や梅雨」

(240 聯 389 題「梅雨」、山「連歌集」(1638)「元祿

六年／何路) (

「佐々木伊織／橘の露は涼しき匂ひ哉」(241)

「青山将監／長き根は汀ゆかしき菖蒲哉」(242 聯

373)

「正祖／せき入て螢も庭の清水哉」(243 聯 408)

「夏ふかし言葉守の神慮」(244 聯 496)

「津田孟昭下屋敷蓮池／水こもりの下はえならぬ

蓮哉」(245 聯 430)

「浅加十郎右衛門子ニをくれてこもり侍比／花に

なせ心のうさを忘草」(246 聯 492 「悼人の許へ」)

「多賀信濃下屋敷／海見えて遠く涼しき木の間

哉」(247)

「佐々木定堅息祝儀／生行ん小松や世々の下涼

み」(248 聯 458 「小児を祝する事有家にて」)

学堂前句付あり、年中の勘定もあり、能仕が来年

二月二十五日御忌日会において脇を勤めることが

決まる。(宮一)

七月二十七日

学堂月次連歌(延期された会)あり。(宮一)

八月四日

学堂連歌あり。(宮一)

八月十日

学堂前句付あり。(宮一)

八月二十九日

学堂連歌の会(延期となった、八月十七日の会)

あり。(宮一)

九月十日

学堂前句付あり。(宮一)

九月二十七日

宮仕ら、内々の願により、御神前に立願、千句張

行の予定。(宮一)

秋

『能順自筆発句書留』に発句 249 ～ 262 あり。⑦

「横山弥平次／松風のかよふや蟬の下涼み」(249

聯 417)

「夏虫の影やゆきかふ秋の露」(250 聯 482 「秋の

水」)

「知頼／夕立の露やかたへは秋の庭」(251 聯 441

「かたへの」)

「名月／今夜にも見さりし月の今夜哉」(253 聯

698)

「そはたてる枕は雁の雲井哉」(254 聯 707)

「山もあれと花よ紅葉よ野への秋」(255 聯 778 「山

はあれと」)

「三吟 直忠・元胡／夜は長し手枕疎し月もか

な (256) 聯 671

「本多伊織殿悼／風の上の世をおとろくや荻の露」(257)

露 (257)

「蒼青き爰や梢の秋の庭」(258) 聯 788 「秋の色」

「応信興行／薄くこき梢は霧の紅葉哉」(259) 聯

547

「孟昭下屋敷二而／澄にけりかくてそ月の秋の水」(260) 聯 638

水 (260) 聯 638

「十三夜／半をもおしまさりきや秋の月」(261) 聯

738

「半田正祖飛州高山饒別／秋そ行よしさは待ん春の空」(262) 聯 772 「半田正祖の飛州へまかり給ふ饒別に」

「半田正祖飛州高山饒別／秋そ行よしさは待ん春の空」(262) 聯 772 「半田正祖の飛州へまかり給ふ饒別に」

饒別に」

「学堂連歌の会 (先月十七日の会) あり。」(宮一)

「学堂前句付あり。」(宮一)

「学堂連歌の会 (今月十七日の会) あり。」(宮二)

「学堂連歌の会あり。」(宮一)

「学堂連歌の会あり。」(宮一)

「学堂連歌の会あり (先月二十三日の会、能仕が勤める)。(宮一)

める)。(宮一)

十二月九日

学堂前句付あり(十日の前句付、能東が勤める)。(宮一)

十二月十一日

初雪が降り、初雪の会興行が必要となるが、天神講ゆえ初雪の会は明日に延期す。(宮一)

十二月十二日

初雪連歌の会、当人は能調・能東宅で行う。(宮一)

十二月十七日

冬

学堂連歌の会あり、能東が勤める。(宮一)

「能順自筆発句書留」に発句 263、278 あり。⑦

「政長興行／松風や時雨降をける今朝の霜」(263) 聯 976 題「雑」

「政在梅か枝文台開／梅か枝は花の常盤か冬の陰」(264) 聯 962 「本多政敏朝臣の亭にて梅か枝を蒔絵しける文台開二」

蒔絵しける文台開二」

「山晴て木葉時雨の川瀬哉」(265)

「長質亭二而／雪時雨山見かくれの夕日哉」(266) 聯 978

聯 978

「直方下屋敷にて／さそふなよ散とも風の下紅葉」(267) 聯 857

葉」(267) 聯 857

「応信二而／霜に置月に澄夜の風哉」(268) 聯 884

「後藤治右衛門興行／雪の色も其さまくの梢

哉」(269)

「定連一子悼／袖の上のみしやはかなき玉雹」(270)

聯 892 「高島定連の息うしなひし悼に」

「正勝老母悼／淡雪をみてもおもはんうき世哉」

(271)

「元興二而／埋火にかたふく程や春の夢」(272)

「柴屋写文台開／中黒秀碁「基」興行／柴の屋に

跡はとまりぬ雪の道」(273) 聯 940 「柴屋の文台開

に」

「正供悼／人の世はかへらぬ年の名残哉」(274)

「武康二而一折／月雪の空へも年の名残哉」(275)

「冬籠たへすや片枝梅の花」(276) 聯 961 「堪すやは

すゑ」

「孟昭二而一折／雪の内の松吹出る風哉」(277) 聯

930

「身の外にゆかはおしまん年もなし」(278) 聯 974

「横山氏従の亭にて」

元禄七年(一六九四)

六十七歳

一月一日

神前にて衆中発句を講ず。(宮一)

二月二十四日

春

発句「しのゝめにみるや来る方春霞」(書留 279)

7、聯 15)

連歌あり。(宮一)

「能順自筆発句書留」に発句 279、300 あり。7

「津田玄番殿／御影開 心たにの哥あり／まもり

けり神風匂ふ梅花」(280) 聯 28 題「梅」

「伴八矢殿／梅か香はうれしき風の便哉」(281) 聯

40)

「雪うすく霞ふかむる外山哉」(282) 聯 66)

「山崎庄兵衛殿／白露の枝うつりする柳哉」(283

聯 106)

「欲生／遠近の雪や村山村霞」(284) 聯 77)

「さ夜中にしらめる空や春の月」(285) 聯 136)

「菊地十六郎殿 薄詩絵／文台開 孫子祝詞／白

露の角くみ出る薄哉」(286) 聯 117)

「政在卿／鶯の枝と成ける柳哉」(287) 聯 108) 「枝と

成ぬる」

「遠山の雪問や増る瀬々の声」(288) 聯 74)

「梅か香や嵐の内の薄霞」(289) 聯 33)

「風を呼うそふく梅の匂ひ哉」(290) 聯 49)

「今枝民部殿／夕やみや匂ひにむかふ窓の梅」(291)

聯39「宿のうめ」

「竹田忠張妻女悼／春の夜の夢にみなせるうき世

哉」(292 聯294「悼人のもとへ」)

「同忌中ニ／四方の色や霞にこもる宿の春」(293)

聯31「窓の梅」

「元為ノもとなにて／花に誰とはさらましや宿の

春」(294)

「欲生ニ而／花毎におもひ出へき桜かな」(292 聯

239「都へのほる餞別に欲生と両吟」(歌番号292は

重出であるが⑦に従っている↓元禄三年春『能順

自筆発句書留』91句参照)

「明日は花有ともおしき夕かな」(295)

「上京ノ時／旅衣立うき花の情哉」(296 聯189「饞

別の会に」

「爰もおし行んかしこも花の時」(297 聯190「都を

出る比」)

「花の色は人の心のかきり哉」(298 聯181)

「ともに春いさ桜とや帰山」(299 聯248「越前帰山

にて」)

「素久・好治三吟／遅桜あひみる老の命哉」(300)

聯266「年経て都にのほり旧友にあひて」

能通、連歌の器量にて学堂二十三日の宗匠のうち

に入れられる。(宮一)

学堂前句付あり、点者能順。(宮一)

学堂月次連歌あり、当人は能音。(宮一)

能利、天神講について、能順・常久と相談して年

預に返事。(宮一)

学堂月次連歌あり、御勤は能順、当人は常久。

(宮一)

学堂前句付あり、能順点。(宮一)

能順・能俣・能実・能楽・能什・祐能が学堂で寄

合。(宮一)

御門主様御千度来訪、亭主方能順・能観。(宮一)

学堂月次連歌あり、当人能二。(宮一)

本多虎之助長直悼の発句「夏虫の光ややかて袖の

露」を詠む。(本田に関しては、元禄七年五月順

死とあり)(書留308⑦)

学堂月次連歌あり、当人能盛。(宮一)

学堂前句付あり、清書点作、点者能順。(宮一)

閏五月六日
閏五月十五日

四月二十三日
四月三十日
五月六日
五月十日
五月十九日

五月二十一日
五月二十三日
五月

閏五月十六日

年預随榮、誹^{つひ}諧の点者と清書本についての、松梅院を介した公儀からのお尋ねに、宮仕や借屋を含め点者をする胡乱の者は誰もいないと答える。

閏五月十七日

学堂月次連歌あり、当人随林。(宮一)

閏五月二十三日

学堂月次連歌あり。(宮一)

六月四日

御手洗水神事、預坊老体により、二臈能順、内陣に入り補助す。(宮一)

六月六日

学堂月次連歌あり、能順。(宮一)

六月九日

学堂連歌あり。(宮一)

六月二十三日

学堂月次連歌あり、当人は能竹。(宮一)

六月二十八日

学堂万句竟宴の会あり、預坊能順。(宮一)

六月

蓮池能貨大徳の七回忌に発句「したひみる其方に涼し空の月」(書留309)を詠む。

夏

『能順自筆発句書留』に発句301～311あり。⑦

「松梅院禅覚興行十九歳なれば／今よりのゆかしき色や若楓」(301 聯312「若き人の連歌執心の会

二)

「□道所望 当座 和漢／待る、やいかに遠山子

規」(302 聯362)

「豊島小十郎篤宜始て訪来しに／とはるへき里か

は嬉し郭公」(303 聯347「大坂豊島篤宜始て訪来

しに」(「宿かは嬉し」)

「篤宜／待えしは契有けり郭公」(304 聯328)

「山里にて／山里は夏こそことに木々の陰」(305

聯494「山里を訪て」)

「山に住心の奥や夏の陰」(306)

「音ふかし木の下露の五月暗」(307 聯495「木の下

露や」)

「於光円／夏は風さやけき竹の台哉」(310)

「四吟／秋風はふれすて近き夕哉」(311 聯511「秋

風のふりすてちかき」)

随吟・能順、御手洗水につき、本日より潔斎。潔

斎の祝義あり。(宮一)

能順発句あり。「七月朔日北野の森に子規の啼を

き、て／たちかへり秋やはつねのほと、きす」

(聯776) (書留312⑦「七月朔日 時鳥を聞て」)

能順発句あり。「七月七日北野御手洗の神事に／

あふきてもけにみたらしや天川」(聯799) (書留313

⑦)

学堂前句付あり、点者能順。(宮一)

七月二十三日

七月二十七日 学堂前句付勘定あり。(宮一)

八月四日 学堂連歌あり。(宮一)

八月二十三日 能利の旦那より大鏡の寄進あり。(宮二)

八月二十九日 学堂連歌(十七日の念)あり。(宮一)

九月三日 さる七月の手洗水の時分に、玉松院殿が能順を内陣に入れたことに疑問が発せらる。(宮一)

九月六日 友世、能観宅来訪、能順・常久・能什一座あり。

(宮一)

秋 『能順自筆発句書留』に発句314〜330あり。⑦

「三吟／風の色さま／秋の草木哉」(314)

「萩の露あらそふ風の宿り哉」(315)

「中院通茂卿二而可被有頃／かきりなき風の匂ひや秋の花」(316)

「竹内三位殿ニ連哥ヲすゝめて／言種の花世にちらせ秋の風」(317 聯 602 「竹内三位惟庸卿へ連歌すゝめて」)

「佐太天満宮手向／神におもふ手向は花の千種哉」(318 聯 606 「河内国佐太天神宮法楽」)

「住吉二而／住吉や神代の秋も松の風」(319 聯 823 「摂州住吉の社法楽」)

「撰州住吉の社法楽」

暮秋から初冬

「月をきて春とやいひし秋の海」(320 聯 634 「於墨吉」)

「名月／大かたの秋さへ月の今夜哉」(321 聯 683 「勘解由小路三位殿二而／さま／の色やあつまる窓の秋」(322 聯 791 「左中弁なる学ひする人の御許にて」)

「樋口以洗 五条ノ家二而／うちそひぬ衣雁か音秋の風」(323 聯 711 「擣そへぬ」)

「平岡ノ道すから／行山路暮なほ照せ下紅葉」(324 聯 748 「平岡といふ所の道すから」)

「山道にて萱草おりそへて／菊紅葉いつれかいつれおもひ草」(325 聯 800)

「紅葉々も菊に匂へる山路哉」(326 聯 766 「紅葉さへ」)

「日吉に詣て／をしなへて影は日吉の紅葉哉」(327 聯 751 「日吉のやしろにて」)

近江路から帰山を通り加州へと戻る。(書留 328)

330 ⑦ 「江州しのはら／玉川や錦を洗ふ萩か花」(328 聯 559 「於玉川」)

「暮秋の比 旅立とて／行秋の心もかへり都かな」(329)

「江州しの原にて／しの原の風や朝霜夕時雨」(330)

聯977 「近江路にて」 「しのはらや風のあさ霜」

学堂月次連歌(十七日の会) あり。(宮一)

学堂月次連歌(先月二十三日の会) あり。(宮一)

学堂月次連歌(十七日の会) あり。(宮二)

学堂月次連歌延引、能順他行ゆえなり。(宮二)

「能順自筆発句書留」に発句331、345あり。⑦

「老曾森／冬枯を老曾の森のすかた哉」(331 聯873)

「近江路にて」

「山路を過るとて／こきまませに木葉時雨の夕日哉」(332 聯840 「時雨木葉の」)

「帰山／雲や今朝雪降置て帰山」(333 聯906 「帰山にて」)

「山崎庄兵衛にて家人山崎作右衛門家ニ招請遣し時／松をみて人こそ来ませ宿の雪」(334 聯928)

「半田正祖にて／おもひ来し風の行ゑや今朝の雪」(335 聯901)

「忠張にて／雪の底に鳥鳴竹の垣根哉」(336 聯

952)

「浅加治卿にて／雪戦き竹葉露けき雲哉」(337 聯

982)

「菊地武康宅ニ雪の夜各あつまりて／月雪に明るもしろし今夜哉」(338)

「冬雁／居る雁の心も雪の芦辺哉」(339 聯981 「芦

に雁を画る屏風に」)

「伴氏長治ニ而／埋火は夜長きのみや冬の床」

(340)

「青山氏長玄ニ伴長治ヲ誘引之刻／陰もよし雪に

立よれ宿の松」(341)

「前田氏季□にて／梅に春立休ふか年の内」(342)

「今枝直方江戸下向餞別／行年や今帰り来む宿の

梅」(343)

「春立ぬ行をくれける今年哉」(344)

「降ま、にゆき暮しける今年哉」(345)

元禄八年(二六九五) 六十八歳

二月十一日 折禱連歌あり。(宮二)

二月二十日 衆中年齡并勞の事に関し、友世、能順が六十八歳

にもかかわらず六十七歳とあり、児成の年も随吟の覚えと二年相違すると親書に対する不審を指摘。児成の年について、能作から能順に問い合わせをさせる。(宮二)

二月二十一日

学堂連歌興行。(宮二)

二月二十四日

学堂連歌興行。(宮二)

三月五日

花の会、本年より開始、当人随吟、節分より七十五日を会日となす。(宮二)

三月十九日

能順、袈裟の願入れられず。能東・能観より連状にて言いやる。能順返書にて、願が不許可とされたのは、田舎に長く滞在していたからであろう、

秋に上京、相談すると書く。(宮二)

春

「能順自筆発句書留」に発句346～349あり。⑦

「春の日のいてそよ更に朝霞」(346 聯16)

「渡辺寛宅二而／梅咲て草かうはしき汀哉」(347)

「廿五日／「半田」正祖宅二而 神祇ノ心はへを

／梅か香やあふけは空に春の風」(348 聯52「同し時一日千句第一」「あふけは天津」)

「伴氏長治二而／鶯も梅咲竹の籬かな」(349 聯

41)

四月十三日

千句興行の廻状をまわす。(宮二)

四月十七日

千句習礼あり。(宮二)

四月十八日

千句興行、連衆五座に分かれ、二百韻ずつなす。

四月十九日

能順は不在。(宮二)

夏

随衆死去。(宮二)

六月五日

能順、元政と山何百韻を元政と両吟。「袖毎の世の風匂ふ菖蒲哉」(小)

六月五日

周世、衆中の内々の願を一乗寺(門主)の家老衆に仲介し申し入れる。能順は田舎住ゆえ次の預はなし、年寄衆の鈍色は許容との門主意向あり。

(宮二)

六月九日

学堂連歌あり。(宮二)

六月二十日

学堂十七日の会(連歌)あり。(宮二)

六月二十一日

能東・能悦・能侃・能観に鈍色許可。(宮二)

八月四日

学堂連歌興行。

八月十五日

名月の会、当人能林。(宮二)

能順、何木百韻を詠む。連衆は能順・快全。「唯今宵老の僻目の月もなし」(小②) ↓この発句の

百韻、本年譜の元禄十五年八月十五日条参照。

学堂連歌(先月十七日分の会)あり。(宮二)

十月三日

十月八日 学堂連歌（先月二十三日分の会）あり、能仕が勤める。（宮二）

元禄九年（二六九六） 六十九歳

（宮二）

一月一日

歳旦発句あり。（宮二）^②

十月十七日 学堂連歌の会、能東が勤める。（宮二）

一月二日

預坊（随吟）病気ゆえ、能東、能俣二人のみに預坊の祝儀あり。能順他行ゆえ欠席。（宮二）^②

十月二十三日 学堂連歌の会、随恩が勤める。（宮二）

十一月四日 常室、雲州家中に御祈禱万句あり、序書持参。（宮二）

一月十七日

学堂月次連歌興行。（宮二）^②

（宮二）

二月九日

能順、北国から上京。（宮二）^②

十一月十七日 学堂の会あり。（宮二）

二月十日

能順、改衣の願あり。（宮二）^②

十一月十八日 初雪の会あり、当人常久。（宮二）

二月十五日

能順、他国住のため、鈍色袷姿願を目代に許されず。（宮二）「元禄九丙子年落書之追加」^②

十一月二十日 学堂連歌（二十三日の会）あり、能通が勤める。（宮二）

（宮二）

二月十六日

能順に田舎居住なるまじき旨、門主（曼殊院良応）よりとがめあり。（宮二）「元禄九丙子年落書之追加」^②

十一月三十日 年預受取渡。

十二月一日 昨日より年預は能俣、常円が名代として諸事勤める。（宮二）

（宮二）

二月十九日

能順、鈍色袷姿願について、能東・能林・友世と一乗寺へ参上。二月中に、幾度か願うが、鈍色袷

十二月十七日 学堂月次連歌あり、当人能吟。（宮二）

十二月二十四日 正月法事の預役、当預随吟病氣、二膈能順は遠方雪中で年内上京の予定不明、その際には三膈が勤める旨、目代友世から門主に伝えるよう依頼。松梅院にも伝達。能作から三膈能東に担当を伝達。（宮二）

（宮二）

二月二十四日

預坊病氣のため、能順奉幣を勤める。（宮二）^②

（宮二）

二月二十五日

預坊随吟の元旦発句の会と節振舞あり。（宮二）^②

（宮二）

三月六日

「能順自筆発句書留」に発句350〜363あり。^⑦

（宮二）

春

「花鳥に心つく日のはしめ哉」(350 聯17)

「今枝民部直方／薄曇雪も猶ちれ春の月」(351) 聯

132)

「風露におもひみたる、柳哉」(352) 聯 99)

「雁も今有とや爰に帰山」(353) 聯 122 「於帰山」

「山中を越て／雪に越て更にも春の山路哉」(354)

聯 78 「旅行の比」

「夕霞月のほてる海へかな」(355) 聯 130 「湖海の

ほとりにて」 「月もにほてる」

「難波にて／難波津に咲や生駒の山桜」(356) 聯 256

「難波津にて」

「今宮の山二而／風の色にうつろふ花の夕かな」

(357) 聯 184

「佐藤儀左良重母悼／おもひやる空や霞の袖の

雨」(358)

「嵐山にて／山桜吹や風の麓川」(359) 聯 249 「嵐山

にして」

「花の夕／花の色は散に尽せる夕かな」(360) 聯

176)

「山里二而／爰に咲心やふかき山桜」(361) 聯 235

「山里人のもとにて」

「能東坊賀ノ時／けに永し祝はん日也老の春」(362)

聯 286 「六十の賀しける人のもとへ」

「山吹やけにやへ／の春の花」(363) 聯 276 題「山

吹」

小笠原佐渡守の子息参詣、能順、常円が居合わ

す。(宮二②)

学堂連歌あり、当人能山。(宮二②)

一乗寺に御留主見舞い、能順、能東参る。(五月

五日条「能順坊・能東坊被参管也」(宮二)

能順より、学堂連歌を勤める希望あり。(宮二②)

能順、神供の祝詞を勤める。学堂連歌興行。(宮

二②)

預随吟、病による預上表の願を伝える。(宮二②)

随吟坊の病氣上表願に伴い、二膈である能順の預

職願を出すも、門主許可任命せず。(宮二②)

松梅院より能順に、御手洗水会を勤めるべき旨、

役者能松を通して口上あり。(宮二②)

能順、いまだ預職の補任なし。(宮二②)

「能順自筆発句書留」に発句 364 ～ 370 (366は消去済

の句)あり。⑦

「有明やおもひ馴にし郭公」(364 聯 339)

「徒に幾夜明しつ子規」(365 聯 340)

「紙屋川のほとりにて／紙屋川つゝみあつむる螢
哉」(367 聯 413)

「袖にふけいまた梢の秋の風」(368 聯 509)

「秋の色やまた薄霧の朝しめり」(369 聯 542)

「有明も今三ヶ月の夕哉」(改案傍記あり) (370)

能順、一日より御手洗水の潔斎に入る。(宮二②)

七月二日
七月四日
上座五人(能順・能東・能俣・能悦・能観)「鈍
色袈裟五人之衆」(七月三日条)の袈裟願の事、
門主に伝えるも許容なし。(宮二②)

八月四日
学堂連歌興行。(宮二②)

八月十三日
寄合にて年寄衆の鈍色袈裟の立願、御神慮成就の
上は近日千句興行。(宮二)

八月十四日
学堂連歌(十七日の会)あり。(宮二②)

八月十五日
名月の連歌あり。(宮二②)

八月二十日
学堂連歌あり。(宮二②)

八月二十八日
千句連歌興行のこと、能東病気につき延引す。
(宮二②)

九月十四日
能順・能美・周世が門主灌頂加行見舞。(宮二②)

十一月三日
千句の習礼あり、能順出席。(宮二②)

十一月四日
月題の千句連歌あり、能東、能順が宗匠として五
百句ずつ張行する。第一百韻発句随吟、第二百韻
発句能東、第一百韻発句能順。(宮二③)

十一月六日
初雪(初雪の会(連歌会)であろう)、当人能
楽。(宮二)

十一月九日
能順、能松、門主灌頂加行見舞、献上物を持ち一
乗寺へ参上。(宮二②)

十一月十七日
学堂連歌あり。(宮二②)

十一月十八日
年寄衆、先日の子句と去年の子句を神前に供え
る。(宮二②)

能順、『独吟何路百韻』一卷(発句「埋て猶木高
しや雪の松」)をなす。

(小『小松天満宮誌』(社宝類)能順自筆、跋文あ
り・三条西殿すすめによる独吟聯922) ACDイ綿
抜②p25 (9)

十二月六日
学堂月次連歌あり。能順が勤める。(宮二②)

十二月十五日
世間にはやる、誹諧と名付けた賭勝負に、衆中の
若輩が関わることを禁ずる旨、周知。「勿論誹諧
は連哥の邪魔」(宮二②)

元禄十年（二六九七） 七十歳

一月一日 歳旦発句を構す。(宮二②)

能順、七十歳になり次の句を詠む。「七十になれる年／身にそ思ふ年にまれなるけふの春」。(聯18)

18)

一月八日 朝日寺法事、預代能順が勤める。(宮二②)

一月十一日 御講(天神講)、当人能順。(宮二②)

一月十四日 法事、牛玉之作法、預代能順が勤める。(宮二②)

一月 能順、独吟百韻を詠む。「松に吹梅に匂ふや世々の風」(小②p25)

の風」(小②p25)

二月四日 学堂連歌(二十三日の会)あり。(宮二)

二月十七日 学堂月次連歌あり、能東が勤める。(宮二)

二月二十四日 御神供学堂連歌あり。

二月二十五日 能順、預坊代二臈。(宮二②)

閏二月十五日 学堂月次連歌あり、能順が勤める。(宮二②)

閏二月二十三日 学堂連歌あり。(宮二②)

三月十七日 学堂月次連歌あり。(宮二②)

三月廿七日 能順の七十賀会あり。(宮二②③) 能順、発句を詠む。「七十の賀の会に／後たのめ花や見んもし

老のはる」(聯183)

老のはる」(聯183)

四月

能順、小松へ下向。北野の宮仕側は秋の頃には必ず上京を希望するが、能順は来春上京を主張。(宮二(同年十一月十六日、六月二十八日記事)②③)

六月七日 学堂連歌興行。(宮二②)

六月七日

六月二十八日

本年の御手洗水の御神事は、預随吟が病身で、二臈能順が加賀下向のため、三臈能東が勤めたい旨、梅松院(禪覚)へ一札あり。(宮二②)

秋

素庵居士の七回忌にて発句を詠む。「干ぬ袖や尾はなか本の草の露」(聯58)

七月一日

八月四日

十月十一日

能東・能観、その他一門衆より加州の能順に手紙、十二月月上旬までに上京を促す。(宮二)

十一月十六日

寄合にて、預随吟中風再発、上表避けられず、二臈能順上京の上で、預就任の願を出す旨、相談あり。預随吟上表、能順預願、年預は能東とする案。(宮二②)

案。(宮二②)

三条西実教が、七十八歳で男子をもうけた祝意を

十一月十七日

込め発句を詠む。「西三条殿七十八にて男子まう

け給ふ祝言に／雪に生て春待千世のみとり哉」

(聯95) ⑨

十二月二十四日

寄合にて、加州の能順より、上京は当年中は難し

いと既に手紙にて意志表明あり、「年預之事不在

京而難勤事」なので、能悦を預に推薦とする案を

了解。(宮二②)

十二月二十六日

能東・能観、年寄・評議から加州能順に手紙、能

悦の願を知らせ、能順には年内か新春早々の上京

を強くすすめる。(宮二②)

十二月一日

随吟上表、能悦預職願、門主(曼殊院良応)了

承。(宮二)

十二月六日

能順、加州より上京。(宮二③) 以後、年預代を

勤める(翌十一年十一月より預坊)。(宮二②)

十二月二十二日

学堂歳暮の会あり。(宮二②)

十二月二十四日

学堂立春の会あり、能順勤める。(宮二②)

元禄十一年(一六九八)七十一歳

二月十日

西池主膳、精進の頭を務めるゆえ、能順・能東・

能観・友世、賀茂へ見舞。(宮二②)

二月二十四日

学堂連歌興行。(宮二②)

二月二十八日

預能悦発句の連歌、随吟坊にてあり。(宮二②)

五月四日

「かぎりさへ」百韻後記に関するこの日時を記し

た紙あり。(A(ただし、綿拔氏が2009年にされ

た小松天満宮調査では未確認)

六月一日

古木の影向の松倒れる。(宮二)

六月九日

寄合にて、能悦の預職は半年間の願にて、今度上

表の願申す旨報告。(宮二)

六月九日

学堂連歌あり。(宮二)

六月二十一日

新たに植えた影向の松に首くりあり。(宮二)

六月二十七日

能悦の御手洗水会の勤めに関し、能順、介助の役

を命じらる。(宮二②)

六月二十八日

門主より影向の松を寄進、植え替える。(宮二)

六月二十九日

左近の馬場に首くりあり。能順・能東、松梅院

より七月七日の御手洗水会延引の相談を受け、了

承。能順、預能悦も了承。(宮二②)

七月六日

松梅院、影向の松植替祝の千句興行の意向あり、

能順・能東と相談し、題を定める。(宮二②)

七月七日

能順、影向之松植換後の奉幣に参加、鈍色着用を

松梅院から許可あり。(宮二)随吟死去。(宮二)

七月二十四日

寄合にて、能悦上表の事と能順預職の事を門主に

七月二十九日

申し入れることを決定。(宮一②)

能順、宗祇の絵像(興善院法印良勝筆・近衛家熙賛 京大総合博物館蔵)に裏書、宗祇二百年忌の

十句連歌興行の際の作成絵像と覚えを記す。(宮

二②)

「北野拾葉」所収宗祇法師画像裏書に「此一軸者

貴師宗祇公為二百年忌／追福令十句連歌興行依仰

此影／像者也／元禄十一寅歳七月廿九日 能順

(花押)」

※能順が絵像裏書で言及している、宗祇二百回忌

追善十句連歌は、元禄十一年の宮仕記録にはみえ

ないが、能順の絵像学堂寄進にあわせこの時期に

なされたか。『元禄十一年七月十五日十句』(J所

在不明)、『元禄十一年 北野十句』(小 H)が存

する由。↓元禄十四年七月二十六日

七月晦日(推定)

能順、祇公忌日月次の会始にて発句「朝顔ののこ

るや人の世々の秋」を詠む。

「祇公忌日月次の会初に／朝かほの残るや人の

世々の秋」(聯 613 書留 371「宗祇法師忌月会始」

⑦)、(『元禄十一年宗祇忌懐旧百韻』(能順筆

八月四日

(小) AD「元禄十一年七月晦日」
学堂連歌興行。(宮一②)

八月五日

能順、宗祇の絵像(興善院法印良勝筆)を学堂に

八月十二日

寄進。(宮一京文展②)

八月十二日

随吟の五七日法要に「袖の上の露や心の手向草」
を詠む。(随吟五七日手向／袖の上の露や心の手

向草／袖しほる共」書留 372⑦ 聯 538「全(悼人の

もとへ)」

八月二十八日

米倉丹後守社参、松梅院・妙藏院・梅禅・徳勝

院・能順・能楽・能什・能通・幸世が影向の松ま

で送り帰る。(宮二)

九月六日

学堂連歌あり。(宮二②)

九月十三日

「十三夜／見つ、月おもひくらふる今夜哉」(379

聯 737)を詠む。

秋

『能順自筆発句書留』に発句 373〜382あり。⑦

「恵乗「快全」上京ノ時／告て来し初雁うれし秋

の風」(373 聯 712「越路よりのほりける人を待悦

て」373句翻案 374句「初雁や告てさそひし秋の風

共」有り)。

「身にもなせ草木の老は秋の色」(375 聯 725「快全

好澄三吟に」

「那波氏祐英二而／雨にもそとはんとおもしし宿の月」(376 聯 667 「雨の日 むかひに人を来しけるに」)

「名月／身の上につもれる月の今夜哉」(377 聯 700)

「白菊の色やあまりて今朝の露」(378 聯 726 題

「菊」、「今朝の霜」)

「竹森檢校興行／紅葉々や千入に匂ふ菊の庭」(380

聯 765)

「有明のうつりも行か秋の色」(381 聯 661 「有明

に」)

「平岡二而／紅葉々も入にしたかふ山路哉」(382

聯 759 「山里にて」)

「神無月としてしも今朝の時雨哉」(書留 383 聯 837

「さてしも今朝の」を詠む。

能順・能観・友世、一乗寺に参上し、能東の不始

末を門主にわびる。(宮二②)

所司松平紀伊守(信庸) 北野来訪、松梅院・玉松

院・梅禪・徳勝院・能順・能観・能楽・能什・目

代父子出迎え。能順・能東・能観・友世が、山本

大炊助殿に能東赦免の礼をいう。(宮二②)

初雪の会あり、当人能覚。(宮二②)

十一月三日

門主から目代を通じて、能順の預職許容の返事あり、十九日に小折紙、法橋の位は見合わせる事のこと(↓十一月二十四日)(宮二②)

寄合にて、年預定を改定、年預扱を月番とする。

十一月十六日

十一月二十三日

「極月正月、二月三月、四月六月、五月七月、九月壬戌十月、八月十一月」(宮二)

預坊を務める。

十一月より

十一月四日

能順法橋を望み目代に申し出る。(宮二②)

十二月十日

十二月十九日

門主、能順の法橋位の事、許容延引。当年中は延引あるべきとの旨。(宮二②)

冬

預坊能順へ、歳暮の御祝儀銀子一枚あり。(宮二)

十二月十九日

「能順自筆発句書留」に発句 384〜389 あり。⑦

「雪までと色を残さぬ梢哉」(384 聯 944 「色に残さぬ」)

ぬ」)

「朝日影匂ふや霜の花雲」(385 聯 876 題 「霜」)

「神松に降初し雪や手向種」(386 聯 900)

「月影や氷で残る今朝の霜」(387 聯 878)

十月九日

十月十八日

「雪に月おなし雲井の高根哉」(388)

「年を捨てまたはや迎老の春」(389) 聯 967 「またれんととも」

三月十二日
三月十七日
三月十八日
春

学堂連歌(六日の会)を本日興行。(宮二②)

学堂連歌の会あり。(宮二②)

花の会あり、当人常久。(宮二)

「能順自筆発句書留」に発句 390 ~ 395 (391 消去句)、

397 ~ 412 あり。⑦

元禄十二年(一六九九) 七十二歳

正月朔日 八嶋御神供頂戴、能順小預をつとめる。(宮二②)

正月廿二日 瀧川丹後守と子息、北野社参、松梅院・妙藏院・

玉松院・能順・能観・能楽・能什・能範・周世が

出迎える。(宮二②)

二月六日 学堂連歌の会、能順勤める。(宮二②)

二月十七日 学堂の会あり。(宮二②)

二月十九日 門主、能順の法橋昇任の願を許す。(宮二②)

二月二十一日 能順坊法橋官錢、五貫七百文。(宮二②)

二月二十四日 学堂連歌(表八句の次第は発句能順、脇能悦、第

三能東)をなす。(宮二②)「二月廿四日 奉幣之

手向／神も此幣は見そなへ花の枝」(書留 396 聯

146 「神供」)

三月四日 父の遠忌にて発句を詠む。「相国寺慈照院 親父

遠忌／法事ニ 三月四日／手向する心や色香法の

花」(書留 413)

へ行人のもとへ」

「雨は今朝緑に春の野山哉」(395 聯 291)

「佐々木氏定堅娘悼／若草に干かたき露の袂哉」

(397)

「夜の雨やかくこそ花の朝霞」(398 聯 142 題「花」、

「夜の雨や花の朝露朝霞」)

「うるはしく雨やかしつく花の露」(399 聯 153)

「花の色はよしや吉野も嵐山」(400)

「真如堂のほとりにて／木のもとに世を尽さはや

山桜」(401 聯 230)

「花に鳥白雪こほす羽風哉」(402 聯 188)

「嵐山／見て暮せ明日は嵐の山桜」(403 聯250「めでくらせ」)

「筏士や花に棹さす大井川」(404 聯210「大井川にて」(詞書))

「かけ初し心のしめや八重桜」(405 聯243「神前にて」(詞書)、「懸初て」)

「於智恩院／たのしみを極る花の盛哉」(406 聯209)

「於祇園／花の色もむへなる神の園生哉」(407 聯208「花のいろむへなる神の」)

「於清水寺／滝の音は花に落来て水もなし」(408 聯207)

「散花や又山風の一盛」(409)

「万日念仏之場ニ而／人と花迎もらさぬ色香哉」(410 聯171「万日念仏の座にて」(詞書)、「花に人」)

「樹岩能茂大徳五十年忌／手向つ、おもふも花の台かな」(411)

「姉妙光院尼死去。「妙光院尼悼／身やしはし残れる枝の花の露」(412 聯219「あねの尼に成有ける

五月六日

五月十九日

六月六日

六月九日

六月廿八日

夏

におくれて」(詞書)、「身や今年」)

京都にて、元興宛に書簡を記す。書留414〜416の句中中にあり。(個人蔵①)

寄合にて、八百年忌(午の年)の修行の品など相談、行事は連歌万句、大々百味、奉加帳は来辰の年に出すなど検討。衆中に廻状。(宮二②)

学堂月次連歌あり。(宮二②)

学堂連歌あり。(宮二②)

松梅院(禪覚)より能順に御手洗水の心得についてお尋ねあるゆえ、能順、御手洗水ノ記の一覽を借りることを希望する。(宮二②)

「能順自筆発句書留」に発句414〜419(418消去句)あり。⑦

「時鳥初音や雲井夕月夜」(414 聯333)

「妙心寺 大通院にて／柏樹や爰に木ふかき夏の庭」(415 聯487「禪寺にして」)

「素閑居士十七回忌 七月十六日取越／ぬれてつむ袖やあな卯の花の露」(416 聯315「懐旧の人の許へ」)

「袖に風あまるや松の下涼み」(417 聯456「やこと

なき人の許より、嬉しき事あまた有つる謝礼の心
はへに、「袖にふけあまるか」↓「やことなき
人」は靈元院と推定(3) ↓ 聯 604

「夕立はかたへ涼しき雲井哉」(419 聯 440)

七月六日

「御手洗水之時 七月六日／むすふ手や清く涼し
き秋の水(改)をのつから涼しく清し」(書留

422)

七月二十九日

能順、学堂にて宗祇忌日会をつとめる。(宮二 2)
靈元院に発句を献上「うへのおのこまいりあひし
に、発句つかふまつれとのたまへは／たちまじる

草の袂も花野哉」(聯玉集 604) (北野拾葉 2D)

草の袂も花野哉」(聯玉集 604) (北野拾葉 2D)

八月四日

学堂連歌あり。(宮二 2)

九月六日

学堂月次連歌あり。(宮二 2)

九月十三日

「十三夜／我國の物や今夜の空の月」(書留 433 聯
740)を詠む。

学堂の会あり、能吟発句。(宮二 2)

嵐山で「嵐山にして／河水やあらしの山の下葉」
(書留 437 聯 760 「したもみち」)、「同時／野は枯て

薄計や秋の風」(書留 438 聯 580 「嵯峨野にして」)、「
帰るさに月を見て／月出て山のかひある紅葉

哉」(書留 439 聯 761)を詠む。

朝飯後、寄合にて八百年忌について協議、万灯を

ともす、七百年忌連歌百韻、七百五十年忌の発句

は竹門様、今回も依頼する等。この後相談しばし

ばあり。(元禄十三年十一月二日の「かさ付誹諧

之事」、十二月八日など)。(宮二 2)

学堂連歌あり。(宮二 2)

閏九月十七日

閏九月十八日

学堂連歌あり。(宮二 2)

秋

瀨川丹後守父子社参、松梅院・周世・能順・能
楽・能什出向。(宮二 1)

「能順自筆発句書留」に発句 420 ～ 439 あり。 7
「下露やまた秋風の忍ふ草」(420 聯 614 題「忍草」、
「しら露や」

「清き瀨や心の麻のゆふ蔽」(421 聯 468)

「天河今夜水なき空もかな」(423 聯 518)

「自得能重大徳十七回／哀おもふ秋は一村薄か
な」(424)

「夕月夜初雁近き雲井哉」(425 聯 710 「雲まかな」

「月出て雁待かほの高根哉」(426 聯 714 「出て月」

「亡父廟参之時／露はかり袖に残れるむかし哉」

(427 聯 529 「亡父能舜廟にまいいりて」)

「薄／秋風や打出る波の花薄」(428 聯 577)

「中秋雨天 大風 夜更鎮り 月少見えたり 好

治来入相 かたらひ 夜更ぬ／もらせ雲つゝ、むへ

き名か秋の月」(429 聯 684)

「本多主殿政道家老二／相被加祝詞／吹そふや松

に千秋の家風」(430 聯 822 「家相続すへき人の祝

言に」)

「清水寺二而／峰の月滝に落来る光かな」(431 聯

630 「於清水寺」)

「萩／花にみし色は下葉の小萩哉」(432 聯 553 「花

散て露も下葉の」)

「鴟鳴て梢の秋の夕かな」(434 聯 795 「秋の木末

の」)

「廿一日 御作代／秋は猶ありとや爰に遅紅葉」

(435 聯 755)

「祇公掛物開 半田正房所望 言葉の千入や染し

筆跡(改)や千入に」(436 聯 783 「祇公墨蹟開

に」)

初雪の会(連歌会)、例年通りあり、当人能覚。

十二月三日

(宮二②)

十一月十六日 能悦の上表を門主許可、能順、小預職の願を目代

へ申し入れる。(宮二②)

十一月十八日

能順、『長享二年一月一日宗祇宗長両吟百韻』(発

句「若水の鏡や昨日雪の影」を写す。(小(石川

十二月四日

県指定有形文化財)

十二月七日

能順ら、梅松院にて寄合、神人諸国へ札賦の事を

禁ずる由を相談。(宮二②)

十二月二十日

能順・能東・能観・松梅院・妙藏院・徳勝院・周

世で、一乗寺を尋ね、山本大炊助殿と対談、神人

の件申し入れ、門主聞届ける。(宮二②)

(宮二②)

冬

西三条大納言(実教)、黄金二枚小判二両寄進。

十二月二十一日 西三条大納言に、能順の取り持ちで、「神識電の勤

仕」と「連歌執行弥無懈怠相務申候助成」のため

使用と記載した受取手形を渡す。半額は学堂に寄

進。(宮二②)

『能順自筆発句書留』に発句440〜449あり。⑦

「木枯の尽して松の嵐かな」(440 聯 863 「木枯」)

「松風や爰に時雨の相舎」(441 「是も」(第二句)

聯 846

「降初てつもらは幾世松の雪」(442)

「またれ来し遠山幾重今朝の雪」(443) 聯 903

「凌き来し心ふかしや雪の友」(444) 聯 950 「友の訪来しに」

「またれ来て今そ心も雪の友」(445)

「さ夜風おとろく雪の朝戸哉」(446) 聯 910

「雪晴て月に雁鳴雲井哉」(447) 「月晴て雪に」 聯

920

「行と来と先あふ春や年の内」(448) 聯 963 「年内立

春」

「はしむとてはしいさよふ年もかな」(449)

元禄十三年(一七〇〇) 七十三歳

一月一日 歳旦発句講ず。(宮二②)

一月三日 裏白連歌あり。(宮二②)

一月廿二日 学堂にて連歌、能順坊月次あり。(宮二②)

二月五日 学堂にて、明日の予定の連歌今日あり。(宮二②)

二月二十四日 学堂連歌あり。(宮二②)

春 「能順自筆発句書留」に発句450～459あり。⑦

「此国や光和く日のはしめ」(450) 聯 21

「若菜／梅か香の若菜に匂ふ袂かな」(451) 聯 43

「淡雪や柳の糸のかた結び」(452) 聯 100

本多政長(加賀藩家老、寛永八年(一六三一)～

宝永五年(一七〇八)の七十の賀に発句を詠む。

「本多安房守政長□／杖国の年を祝て／千年をも

経よ七かへり老の春」(453) 聯 284 「本多政長朝臣

の七十に成給ふ年の賀に、鳩の杖に添奉りて」

「横山外記氏従七十の齡を賀して／まれに猶あひ

みよ松の花の春」(454) 聯 285 「横山氏従の七十の

賀に」 「老のはる」

「光韶卿ニ而／見るのみに心は花の色もなし」(455

聯 160)

「雨晴て夕をかへす春日哉」(456) 聯 287

「花の色にかくろひ行か今朝の月」(457) 聯 143

「桜色の風青み行梢哉」(458) 聯 229

「藤波の越るや春の末の松」(459) 聯 274

学堂月次連歌あり。(宮二②)

学堂連歌あり。(宮二②)

能順の仲介により「岷江入楚」を北野学堂で購入

することを計画、同年七月九日に購入を終える。

(宮二②B)

六月二十六日

学堂の会(六日の会が延引)あり。(宮二②)

七月一日

夏

『能順自筆発句書留』に460、467句あり。⑦

七月七日

「後藤勘兵衛庭をみて／山吹やけに言葉も岩つ、し」(460)

七月十九日

「相国寺縁西堂慈照院対馬餞別／別るとも月日そ

七月二十三日

早き後の春」(461)

七月二十九日

「今日のみや春の初音の子規」(462)

八月四日

「問とはす手枕うとし郭公」(463 聯356「欲生と両

八月八日

吟に)

八月十五日

「鵬老のさちなる寢覚哉」(464)

八月廿五日

「樋口永甫二而加州茶湯／五月雨の古事かたれ

九月六日

相舎」(465 聯388「相やとりせし事侍て」「ななき

日かたれ」)

「前田清八直忠悼／おしめはや短き人の夜半の

能順・能也・能玉が所司代並びに町奉行衆に遷宮

月」(466 聯398「前田直忠身まかり給ふ悼に」)

の首尾順調であることを報告。(宮二②)

「月を待夕や雲の下涼み」(467 聯459)

能順、万句の巻頭の会を開く。風早中納言実種、

「春はおしみ秋はまたれて夏もなし」(468 聯466

同子息中将殿(公寛)、西洞院宰相(時成)出

「春をおしみ」)

「茅の輪をも越るや幾瀬老の波」(469(改)越し) 聯467題「御赦」

立秋の発句。「立秋／秋といへは月待初る夕かな」(470 聯512題「七月朔日」)

七夕に発句。「七夕／月もあれと今夜は星の光

哉」(471 聯513)

学堂連歌(六日の会が延引)あり。(宮二②)

学堂連歌あり。(宮二②)

宗祇弔之会、学堂にてあり。(宮二② 棚町②の

翻刻は「宗祇弔之会」宮二は「宗祇弔之会」だが、②に依る。

学堂連歌あり。(宮二②)

能順亡父能舜の六十年忌。能順、発句を詠む。

「八月八日 亡父能舜大徳六十年忌／したひみる

程や雲井の西の月」(書留472)

発句「久かたの中の一木や花盛」(473 聯694)

能順・能也・能玉が所司代並びに町奉行衆に遷宮

の首尾順調であることを報告。(宮二②)

能順、万句の巻頭の会を開く。風早中納言実種、

同子息中将殿(公寛)、西洞院宰相(時成)出

秋

座。能順脇に出座。(宮二 棚町② ⑨) ⑥)

「能順自筆発句書留」に発句「おもへとも今夜は
あやし秋の月」(474 聯 688) あり。

十二月二日 仮遷宮に立願、嘉儀の連歌あり。(宮二 ②)

十二月二十日 初雪の会あり、当人能林。(宮二 ②)

十二月八日 来春の遷宮に関して松梅院から妙藏院、玉勝院、

徳勝院、目代、年預に呼び出しあり。(宮二)

常久・能玉、松梅院へ笠付誹諧のことで参る。

「天神御年忌絵馬寄進ニ付かさ付宿坊并施主」と
ある板に關し、何も知らないと弁明する。(宮二

②)

十二月九日 稲波左近から能仕に、天満宮御忌にあたり笠付誹

諧とその絵馬が方々あると報告、公儀に詮議を願

う旨、口上を考える。(宮二 ②)

十二月二十日 能山、且方から誹諧の絵馬をかけたいと申し出が

あったが、誹諧について穿鑿されている時期であ

り、受け取らなかつたと言う。(宮二 ②)

十二月二十五日 能順、靈元院に梅花の硯を下賜される。(②)に北

野拾葉 D 石歴展(71梅花硯、74能順発句懐

紙)

十二月二十八日

「元禄十三年臘月廿五日、従上皇長生の寿を憐み
思召て、梅花硯といふ御硯に、綿二屯賜る、翌廿
六日立春なりければ 年のうちの春日かしこき光
かな」(聯玉集 965)

「庚辰十二月廿五日 従 仙洞様唐大御硯并御綿

拝領」(書留 478)

硯拝領後の立春に発句「年のうちの春日かしこき
光かな」、歳旦発句「今朝しるや筆の海より春の

水」を献上する。「同廿八日 立春ニ献上／年の
内の春日かしこき光哉」(書留 478)、「今朝知や筆

の海より春の水」(改) 知や今朝取筆の海春の水」

(書留 479)、「従仙洞恩賜の硯の心を／今朝知や筆

の海より春の水」(聯 22) (能順発句小懐紙(能

順自筆) (小) 石歴展 74 聯玉集 965、22 C ⑨)

「能順自筆発句書留」に発句 475、477 あり。 ⑦

「仮遷宮の時／うつります影や神葉の今朝の月」

(475)

「寢覚に／明日待寢覚はつかしさ夜時雨」(476 聯

839)

「松梅院禅珍遠忌／しのふ世や雪としつもる夕

元禄十四年（一七〇一） 七十四歳 能順預

一月一日 発句披講。（宮二②）

一月三日 松梅院にて裏白の会（連歌）あり。（宮二②）

一月十一日 御講（天神講）あり。当人能順。（宮二②）

二月二十四日 御忌日会の連歌あり。（宮二②） 発句「二月廿四日／花の香は目にみえぬ神の真かな」（書留485）

三月十八日 正遷宮亥刻にあり。（宮二②） 発句「正遷宮／花清しうつります覧神慮」（490 聯145「天神遷宮に」）

三月十九日 末社遷宮酉の上刻にあり。（宮二）

三月二十日 御旅所・紅梅殿・神明遷宮酉の上刻にあり。

田中主馬、北野に参り、酉の上刻、祠官・小預・能順坊・能東坊・能観坊・常円坊拜殿に着座する。巳の下刻小預、能順坊・能東坊・能観坊ら内陣に参る。終了後夏堂にて預・能順坊・能観坊・能什・能通・能玉ら酒宴。（宮二）

三月二十一日 一乗寺に能順・能也が参る。（宮二）

三月二十九日 寄合にて、御遷宮之刻立願千句并百句、発句は上座十人より出詠あるべきと定む。（宮二②）

〔能順自筆発句書留〕に発句480〜492あり。⑦

〔おほろ夜を先三ヶ月の雲井哉〕（480 聯141）

〔梅散て草かくはしき垣根哉〕（481 聯44「草かうはしき」）

はしき）

〔青柳に吹すは春の風もなし〕（482 聯104）

〔風早前中納言実種卿七十ノ賀／経てもへよ猶ま

んくゝの年の春〕（483）

〔鶯の音は笛竹の籬かな〕（484「改」鶯を」 聯

89）

〔千句第一／梅か香や仰けは天津春の風〕（348 聯

52元禄八年に既出）

〔竜安寺大珠院忠首座／住寺祝詞／松の花爰にこ

そ見め寺の春〕（486）

〔同所二而 水辺花／底みえて水影ふかし花の

色〕（487 聯157「水景清し」）

〔同 雨中花／花の色の夕榮久し春の雨〕（488 聯

180）

〔勘解由小路三位殿の家に／柳糸桜ならへて被栽

たる／花の盛に風早中納言殿／御所望／くみする

やとともに柳の糸桜〕（489）

「八重桜／咲おもれ枝は折とも八重桜」(491 聯 242)

「越中高岡 洪屋六右衛門周方／興行／行名残都をおもふ春もかな」

(491 聯 281 「京都にて田舎人の興行に」 「みやこ思はん」)

四月四日 預能順坊、節の振舞あり。(宮二 2)

四月十二日前後 紹巴百回忌の発句をなす(山「連歌集」(1638))。

紹巴は、慶長七年(1602)四月十二日に死去しているの、通例ならば元禄十四年のこの日が百回忌となる。「紹巴百年忌に／かたれ世をおもふ古声反魂」(聯 370)

四月二十日 能順の万句あり。(宮二 2)

六月九日 連歌あり。能徳瀕死の状況にて学堂で行ないがた

く、能也宅で行う(宮二 2)

六月十六日 徳勝院婚礼につき、祝儀の御酒振舞に、能順以下

四十人参る。(宮二)

六月二十日 二十七日開催の千句の題、二十六日の習礼の書付

を廻す。(宮二 2)

六月二十六日 明日の千句の習礼あり。(宮二 2)

六月二十七日

能也・能林両宅にて千句あり。能順・能吉・能也・能什・随林・能通・能玉・能貨・能松・能山・随信・能東・常円・常久・常省・随恩・能林・能範・常能・能曆・随碩・能恵・常祝。(宮二 2)

夏

『能順自筆発句書留』に発句 493 ～ 497 あり。 7

「勘解由小路三位殿二而／つれなしやおもひ捨れと時鳥」(493 聯 353)

「徒に雨な過しそ子規」(494 聯 320)

「玄道所望当座／村雨のふりはへ来なけ子規」(495 聯 322 「ふりはへてなけ」)

「樋口永甫方に而一折に／名残とやかほる風吹梅

雨」(496 聯 391)

「雲峰／白雪のあやしき峰や夏の雲」(497 (改)

「花白く」 聯 506)

上表預法橋能悦死去。(宮二)

七月二十二日

七月二十六日(三十日) 宗祇式百年遠忌之千句を能東坊執行。

(宮二 2)

追善千句二度あり、第一の千句は能順が第一百韻の発句、能東が第十百韻発句、宮仕記録に残るこ

の日の千句、すなわち第二の千句は、能東が第一

百韻の発句、能順が第十百韻の発句をなす。(『待

かひ千句 北野千句』(史(藤) 末尾追記その他に
よる。)

○第一千句第一百韻発句「名高しやあふけは空に
秋の月」(能順)

第一の千句の伝本については、『元禄十一年七月
十五日千句』(『丁所在未詳』)があり、小松天満宮
蔵『元禄十一年 北野千句』には「元禄十一年七
月興行」と記されている由(且)。その他、「元禄
十一年寅年三月十五日」の興行とする国会図書館
連歌叢書本(貴重書わ91121)及び明星大学本
がある。

「祇公二百年忌手向の千句第一に／名高しやあふ
けは空に秋の月」(聯696)

○第二千句第十百韻発句「世々に経る玉の光や菊
の露」(能順)

「此次に能東巻頭発句にて又千句有
其発句」

朝顔の盛ハ人のをしへ哉

巻軸ハ能順也其発句

能順

世々をふる玉の光や菊の露

(史(藤)『待かひ千句 北野千句』末尾追記)

「元禄十四巳天七月廿九日は、祇公二百年忌

手向の千句に

世々に経る玉の光や菊の露

「祇公二百年 千句巻軸

世々をふる玉の光や菊の露

※能順が第一百韻の発句をなす、第一の千句を、

元禄十一年七月に宗祇画像の制作と共に能順主導
で行い、元禄十四年には、改めて能東が第一百韻
の発句をなす、第二の千句を行ったかと考えられ
る。

学堂連歌あり。(宮二②)

八月四日

「十五日雨」。(宮二)

能順発句「中秋／雨に月待も明さん今夜哉」(書
留501⑦)を詠む。

八月二十一日

能順、勘解由小路三位留光卿息、千世丸殿の追善

能東

供養の発句を詠む。

「勘解由小路三位光韶卿息／千世丸殿追薦 八月

廿一日忌日／白玉や碎て袖の上の露（書留504）

八月二十七日

能順、能悦五七日の手向の句を詠む。「能悦五七日手向／色そなきしほる、袖の手向種」（書留503）

⑦ 聯611「懐旧」・817「悼に」重出）

九月十三日

能順、寢覚めに秋の雨夜を詠む。「十三夜寢覚二秋の雨夜の心を／月もよしおもはし秋の夜の雨」（書留507）

（書留507）

九月十四日

寄合にて衆中興行万句の相談あり。（宮二②）

九月二十八日

「能順自筆発句書留」に発句498～507（506は取消句）あり。⑦

「初秋風／萩の葉にうつれはかはる扇哉」（498 聯588題「萩」）

「好治にて一折に／一本にみるや千種の花薄／此心前にも有之 失念如此」（500 聯608「秋のかせ」）

「あらはれぬ又紅葉にも初桜／太山木の其梢とも分ねとも桜は花に顕れにけり」（502 聯754（句のみ））

十月十九日

三条西実教の追善供養の発句を詠む。「西三条殿前大納言実教卿／追薦十月十九日忌日也／いへはえに言葉枯し歎かな」（書留508） 聯874「三条西殿かくれまします時」「言の葉枯る歎き哉」

殿かくれまします時」

十一月五日

万句巻頭鷹司左府（兼熙）発句、能東より披露あり。能東一人で鷹司左府、九条内府（輔実）、二

条大将（綱平）の発句を拝領、後代の佳例、衆中の面目なり。その他、御三家の諸大夫衆残らず発句を献ず、能順、能東の世話で公家衆も多く発句を献ず。（宮二②）

先日の万句発句を奉備。（宮二②）

北野天満宮にて天神八百年忌連歌（「万句之内」）を宮仕らが奉納（能順、懐紙を清書）。（石歴展78）

「八百年忌奉納連歌（万句之内）」

十一月七日

万句習礼あり。（宮三③）

十二月七日

十二月十二日

十二月二十五日

藤原（勘解由小路）韶光、能順の求めに応じて

越中高岡 吉野家六右衛門之春興行／わたれ雁
いかに海山越の秋」（505 聯713「おなしくのほりし人の興行に」「かたれ雁」）

「梅花硯之記」を著す。(小石歴展72)

二月五日

仙洞御祈の御連歌、松梅院にて開始。(宮三③)

冬

『能順自筆発句書留』に発句509あり。⑦

二月六日

松梅院にて昨日の会あり。(宮三③)

「吹暮ぬ明日の初雪松の風」(509 聯91)

二月十五日

「北野天満宮八百年忌一巡」連歌あり。「作者能順以下禪覚・能東等十四人。仙洞の詔によりて張行したもの。」(丁)後水尾院へ法楽連歌発句を献上。この百韻の発句は複数残存する。

元禄十五年(一七〇二) 七十五歳

正月 発句「あら玉の年のをゆらく朝かな」(書留510)

⑦を詠む。

一月一日 歳旦披露あり。(宮三③)

発句「広前の手向は花の千枝哉」(石歴 石歴展84)、(発句短冊(小)、聯159)、石川県立歴史博物館蔵能順連歌発句幅(「元禄十五年二月日」)、「元

一月三日 裏白連歌あり。(宮三③)

禄十五年二月十七日賦何路連歌」(発句「広前の手向は花の千枝 哉」(能順)高(歴博高松宮本

一月二十四日 松梅院より、十左衛門という医師の子より希望の

「元禄十五年二月十五日、たれかれに仙洞御法楽の連歌百韻つかふまつれと勅定の時発句／広前の手向は花の千枝哉」(聯159)

あった、「天神十号の大事」なる物の版行と御忌会での頒布は不許可の旨、能通に伝える。(宮三③)

H600-1608-03×函178)

一月二十五日 松梅院の左近と能通が相談、この度の御忌会に關

しての通知は、能通よりまとめて出す、行事多く、神供連歌会等毎日と一社中に書きやることとする。(宮三③)

二月吉日

八百年忌方句このころまでにかなり完成か。

する。(宮三③)

能順は前田綱紀の代作「此神の守手向や梅のは

一月二十八日 桑原三位(長義)、仙洞の使いにて、松梅院と能

な」(聯50 ⑤)「梅か香や世々の松風神の庭」(聯51)を詠む。また、同じ時の一日千句の第一

順に申し渡しあり。(宮三③)

百韻発句「梅か香や世々の松風神の庭」(聯52

二月一日 大々神供万灯明等、預能順が勤める。(宮三③)

百韻発句「梅か香や世々の松風神の庭」(聯52

ただし、元禄八年既出)もある。『能順・快全・

観生等連歌書留』(小)、『相良頼喬張行北野天満

宮千句連歌』(第三百韻発句能順「花の色に風も

たむくる朝霞」等)(早)、『元禄十五年北野天満

宮八百年御忌御手向万句□第三迄并ニ小松御宮江

御寄進之千句発句共』(小)③⑥)

二月二十五日

前田綱紀より菅公八百年祭により北野天満宮に太刀奉納あり。(前田家雑録・加藩諸事雜記(加藩史)④)二月二十五日に代参が加賀より上京。

(宮三)

二月二十八日

花の会(連歌会)あり、当人随林。(宮三)

三月二十四日

松平加賀守(前田綱紀)より御寄進の太刀、内陣へ奉納。奉納の際、松梅院と共に、能順も内陣に入ることを認められる。(宮三③「石歴展46③」)

三月二十六日

寄合にて、能順の願いニカ条あり。(宮三)

三月二十八日

花の会(連歌会)、当人随林。(宮三③)

四月一日

御寺務様(曼殊院良応)、天満宮御忌の発句懐紙

を献上。(宮三③)

四月七日

預坊(能順)、学堂を借り、家を建てたいと希望する。(宮三③)

四月二十七日

学堂普請願を公儀へ提出。(宮三③)

五月十一日

学堂能俣坊の居宅を能泉の南に引き移し、能順の居宅を構える工事が開始される。(宮三③)

五月十三日

預上表之願を目代に提出する。(宮三③)

五月二十三日

門主より預上表に関して「先相勤候様に」との答にて却下。(宮三)

五月二十四日

御縁起流出と、本屋横井長兵衛による無許可の板行の件につき、興善院良勝(元禄十一年八月五日に、能順から学堂に寄進した宗祇画像の筆者)が、宮仕能什宅を来訪、良勝師興善院良淳が宮仕能愛に写させた本を所持した事情を説明する。

(宮三)

五月二十六日

欲生の父の三十三回忌にて、欲生が懐旧の「独吟何路百韻」(小②)を詠み、能順が点を付す。(⑤)

六月九日

能什宅にて連歌興行。連衆七十七人。(宮三③)

六月二十四日

目代より伝言、経堂願成寺に対する能梅の借銀に關し、衆中より能順へ、返済し手形を取り戻させるようにと促す。この時期能順は京に滞在(能順も幸此方ニ被み事ニ候間)。能梅は、能順の甥

〔沙汰承仕家系同別家之図〕(北)「石歴展77」。な

五三

〔沙汰承仕家系同別家之図〕(北)「石歴展77」。な

〔沙汰承仕家系同別家之図〕(北)「石歴展77」。な

お、能梅は「少つ、二ても納所可仕由」申す（七月六日条）も、返済できず、能順より六十目をやり、借状を返済させる（八月二十八日条）。（宮三）

夏

新築の家で連歌発句を詠む。「脩竹斎新造／かりの宿たのしめ松の下涼み」（書留511）^⑦ 聯463「七十に成ける人の新宅にて」

八月四日

学堂連歌興行あり。（宮三）^③

八月十五日

半陰雨折々、月ノ会如例、当人常室。（宮三）

能順、三吟連歌あり。「名月／た、今夜老の僻目の月もなし」（書留512 聯697「快全・好澄三吟に」

なお、この年、九月十三日も雨（宮三）。↓この

発句の百韻として・小松天満宮に元禄八年八月十五日張行の能順・快全両吟百韻が存する。（^②26）

八月二十日

能順、能東、能観、常久、随林、能通、寄合にて

学堂文庫のありようを検討する。（宮三）^③

閏八月八日

本年春の天満宮八百年忌に際しての御祈禱礼状が

前田備前より能順に届く。

閏八月九日

寄合にて、学堂文庫建立の相談。学堂は能順造作

ゆえに、今まで出入りを断らずにきたが、今回は

断るとの評議あり。こののち文庫普請小屋を造り

閏八月二十日より造り始め、十月六日に上棟、翌

年九月十六日完成、届出となる。（宮三）^③

同日、鷹司左府より、「昨年之万句」（「昨年万句」とも）の写しの所望あり、八月から九月にかけ、発句詠者に分配するなどして宮仕が書写を続ける。（宮三）^③

ける。（宮三）^③

閏八月十八日

万句清書あり。（宮三）^③

閏八月二十三日

万句清書あり。（宮三）^③

閏八月二十六日

万句清書今日仕廻なり。（宮三）^③

九月七日

鷹司左府へ差し上げる万句写本の表紙、能貨に依

頼。（宮三）^③

奉納万句、発句衆に百句ずつ分配、清書あり。

（宮三）^③

能順が今月北国下向するとの噂について、預上表

以前の他国下向は、小預十六、七代のうちにも例

が無いことで、この度の北国下向は無用が相当で

あるとの寄合評議の決定あり。（宮三）^③

九月二十四日

能順の預上表の願、衆中より目代につかわす。

（宮三）^③

九月三十日

「九月尽／心行秋の限のゆふへかな」(書留514 聯

768題「暮秋」)

秋

『能順自筆発句書留』に発句512～514あり。⑦

「一村や秋の千草の花薄」(書留513 聯574題「薄」)

十月六日

学堂文庫上棟。(宮三③)

十月十七日

能順の預上表の願、老衰の理由ゆえ、門主より許

容あり。(宮三③③)

十月三十日

初雪、当人能通。(通例から北野では初雪の連歌

の会ありと推定)(宮三)

十一月二十九日

八百年御忌会方句老宮を神前に奉納する。(宮三

③)

十二月二十五日

寄付証文をしるす(「前預法橋能順寄付証文」光

147⑧宮三(宝永元年十月十四日条能玉持参書付))

十二月十五日か

能作の子五千丸の髪置の祝詞「五千丸髪置祝詞／

雪霜をいた、きまつれ神の庭」(書留518⑦ 聯983

「孫の五千丸に初てあひし祝言に」)

冬

『能順自筆発句書留』に発句515～517あり。⑦

「初雪／雪は今朝朝日に晴る高峰哉」(書留515 聯

909「明るに晴る」)

「松か枝の手向色そふ紅葉哉」(516)

「武康閑居へ／かたらひて冬籠れるや窓の梅」(517

聯960「人の閑居につはしける」)

元禄十六年(一七〇三)七十六歳

春

発句あり。「冥加にかなふ事あまた有ける後、北

野の社の預りをゆつり退て／おもふ事何か都の花

の春」(書留519⑦ 聯24③)

裏白連歌あり。(宮三③)

能順の使いとして、能作、能作の子五千丸を能順

の子供分となし、児成をしたい旨申し入れる。

一月二十五日

能順、目代友世に、能作子五千丸四歳の児成の願

を申し入れる。(宮三③(二月二十四日条))

二月三日

能順、松林坊へ、能作の子の五千丸を養孫とし補

任を願ひ、また孫分ではあるが、北野の屋敷など

を継がせる際には子として譲りたいと口上にて要

望する。しかし四歳での児成の先例の有無が問題

となりかなわず。(↓三月一日)。(宮三③)

二月二十一日

文庫奉行が能類、能辰に決まる。(宮三③)

二月二十三日

能順宅にて、昨年天満宮忌のため延期された神供

連歌を行う。(宮三③)

二月二十四日

連歌あり、発句能東。(宮三③)

二月二十五日

御神供の御番を勤める。(宮三③)

三月一日

能順へ、児成の願に関する門主からの返事口上、

「先此度ハ御^前訴容無之候」との事。(宮三③)

三月九日

上表預能順、今日節あり。(宮三③)

三月十四日

寄合あり、能順と常円、病気で欠席。(宮三③)

三月三十日

能順、三月尽の発句「春を行つれなき老の別哉」

(書留527)

春

『能順自筆発句書留』に発句520～527あり。⑦

「祝ひ事つ、ける子日若菜かな」(520)

「風露のみたれいとなき柳かな」(521) 聯102

「色みせよ花を養ふ窓の雨」(522) 聯152

「遠山に咲や白雲花の庭」(523) 聯167 「庭前のはな

を見て」

「花を先おもふ南の高峰哉」(524) 聯166 「花を待比

南山にむかへる家にて」

「おしめ風錦はつる、糸桜」(525) (改) 「むすへ露」

聯254

「山吹はみならぬ花の契哉」(526)

四月一日

子規を聞き発句。「朔日子規を聞て／夏来ぬと空
に知らん子規」(書留528)

四月十八日

能順から学堂に書付一通を送る、内容は志ある衆
中へ宗祇法師忌日七月晦日会に出席呼びかけ、能
順が会のために白銀二百目を寄付するというもの。

『前預法橋能順書状』(光480B D③⑧③宮

三(宝永元年十月廿日条能玉持参書付)

光照院宮が痘瘡にかかったため、平癒祈禱の連歌

四月十九日

あり、年預能玉宅にて連歌、能順第三に出席「子

規声聞真木の戸を明て」。(宮三③)

常久より、能順が二十二、三日のころに賀州に下

ると年預に伝言あり、目代に通ず。(宮三④)

能作、加州へ下向の旨、能辰を介して目代に伝え

る。(宮三③)

能順、加州下向途中、近江守山、帰山にて発句あ

り。③

「近江守山二而／月うとく名のみもる山夏のか

け」(書留529) 聯399 「近江路過る時守山にて」

「月床し」

「帰山／子規誰をいさめてかへる山」(書留530) ⑦

聯 358 「帰山にて」

六月九日

随林宅にて連歌あり。(宮三 ③)

六月十一日

御講(天神講)、当人能順。(宮三)

六月十五日

自筆遺言状をしたためる。(小) D石歴展 90)

六月三十日

学堂に能順の道具少々あり。(宮三)

夏

「能順自筆発句書留」に発句 531、535 あり。金沢に到着後、竹田忠張、奥村沓州(直輝)亭、今枝直

方別所等で連歌、能順発句あり。(7 ③)

「□汀亭二而／夕露の光晴飛はたる哉」(531 聯

404)

「忠張二而即時／夏の日にむへよらるゝや糸薄」

(532 聯 478 「むへよらけり」)

「又／待宵や□の月の下涼み」(533 聯 461 「心の月

の」)

「奥村沓州亭二而／松風や人なつくめる夏のか

け」(534 聯 498 「奥村惠輝朝臣の許にてめされし

時、加州執柄の家にて国の人々思ひしたがふ心

を」)

「今枝直方別所 池の水辺をみて／かりの子の花

にあそへる水草哉」(535 聯 483)

七月三日

能作、賀州より帰宅。(宮三 ③)

七月二十八日

宗祇の影一幅、明日の会のため能作より北野側が

受け取る。(宮三 ③)

七月二十九日

宗祇忌日之会あり、連衆と年預参加。(宮三 ③)

八月四日

学堂連歌あり。(宮三 ③)

八月十七日

竹田忠張宛修竹斎能順書簡あり。(国学院大学図

書館蔵 7 ③)

書簡内に能順発句「今夜月猶みんつもれ老の秋」。

句は書留 539 に「素立軒殿二而嘉例月見」としてあ

り「素立軒殿二而嘉例月見／今夜月猶みんつもれ

老の秋」(539 聯 699 「月今夜」)、「聯玉集」699 には

「月今夜猶見ん積れ老の秋」として入る。

能順発句あり。「十三夜／照せ猶今夜紅葉の秋の

月」(書留 549)

花何百韻張行(発句踞道「村薄まねけはなひく小

萩哉」、能順は脇に出詠)。(5 金(特一六九一—

二二二))

学堂文庫完成。(宮三 ③)

能順、金沢にて天神の御神詠を写す。(小)「小

松天満宮だより」17号 ③ 石歴展 83)

九月二十六日

九月

『能順自筆発句書留』に発句 536、557 (537取消句) あり。

「知頼興行／荻の声露に更行月夜哉」(536 聯 594)

「素庵居士十三回忌／松虫の音にたてこふるむかし哉」(538 聯 566 「音に恋らるゝ」)

「□□興行／空に雁かはせる荻のは風哉」(540 聯 598)

「踞道／爰をとて越なん雁の端山哉」(541 聯 708 「爰にとて」)

「霧なから／薄霧にすむ空おもふ月もなし」(542 聯 654)

「十七夜 岡島元為／白雲の立なまされそ峰の月」(543 聯 653 「白雲に」)

「菊地治兵衛武包母儀悼／袖ぬれてうふるや忍ふ草の露」(544 聯 617 「菊地武包の許へ悼に」 「摘るや忍ふ」)

「武康内方悼／知らんや夢露の世も秋の床」(545 聯 530 「菊池武庸の御許へ悼」 「知らむや夢露の世を」)

「生駒万兵衛／有明の月にさはるな宵の雨」(546

「素立軒殿ニ而祝詞／花の上に見ゆるや千々の秋の色」(547 聯 607)

「里見元辰興行／秋やいつ鹿鳴山の夕時雨」(548 聯 570)

「小川長兵衛亡父種右衛門懐旧／手向せん其言種の色もかな」(550 聯 537 「企へ悼人のもとへ」)

「露の言種色もなし」

「金森内匠興行／植置し心や色香宿の菊」(551 聯 730)

「島屋与三兵衛正郷新宅／心はへ色香にふかし宿の菊」(552 聯 735 「川島正郷新宅の会ニ」 「うへしうへけり」)

「伊藤平右衛門尉ニ而／夕時雨月も染出し木の間哉」(553)

「渡辺二郎四郎殿柴屋写／文台ニ書付ける／其詠いかに柴屋の夕しくれ」(554 聯 850 「柴屋文台開に」 「聯玉集」では、冬部に入る)

「梶葉二筆 詩絵文台開／岡島元為／言葉の色添筆のはやしかな」(555 聯 779 「岡島元為の御許にて、梶の葉に筆を詩絵にしたる文台開に」)

「長柄橋といへる文台開／半田正祖／古き風吹や

長柄の橋の秋」(556 聯813「半田正祖の許にて、

長柄の橋を蒔絵にしたる古き文台開に」

「菊地武包武蔵餞別／武蔵野の秋を心の行ふ哉」

(557 聯798「菊地武包の江戸へ下り給ふ餞別に」

十二月二十六日 江戸にて十八日に火事。(宮三)

十二月一日、江戸の地震と火事発生につき、御静謐の祈禱を開

始。(宮三) 祈禱の次第には連歌も含まれる。

十二月六日 公儀より北野宮仕に、不時の祈禱連歌の先例の下

問があり、貞享四年三月九日の徳川綱吉厄除祈禱

の際に連歌数千句を献上した旨を答える。(宮三)

十二月六日 能拝の二十三回忌に発句をやる。能拝は元禄四年

十二月六日に死去しているので、十三回忌。「能

拝大徳懐旧 廿三回忌／十二月六日／したへとも

老はをくれつ雪の道」(563 聯948「悼人のもと

へ」⑥)

十二月十四日 梅林院に能仕参上、江戸の地震火事の静謐の祈禱

千句の相談あり、十五、十六日に梅林院にて千

句、十七、十八日には衆中で千句、十八日に両方

合わせて清書、十九日結願にて、即刻献上の予

定。(宮三③)

十二月十五、六日梅林院にて千句あり。(宮三③)

十二月十七、八日北野衆中にて連歌あり。(宮三③)

冬某日 加州にて発句あり。「京より待侘るなといひをこ

せけるに／雪ふかし春を待みよ帰山」(書留564⑦

聯956「都よりとくのほれと人々いひおこせける

に」)

この句に関しては、綿拔氏に元禄十年かとする推

定③がある。宮仕記録を見ると、元禄十年冬

には、瑞吟の預上表と能順の預就任の可否という

問題が発生しており、十一月二十四日の寄合の議

論の記録からは、加州の能順より、上京は当年中

は難しいと既に手紙で意志表明があったことがわ

かる。これを受け、十一月二十六日には、再度上

京を促す手紙を能順に送り、結局能順は十二月六

日に京に到着している。

『能順自筆発句書留』でこの句は、元禄十六年の

能拝の二十三回忌(十二月六日)と、目代友世の

追悼句(同年十二月二十四日以後)との間に置か

れている。元禄十六年、能順は、能作の子五千丸

り枯れてそ)

「北市屋喜兵衛□二而／木枯の月に晴行梢かな」

(559 聯 864)

「有明の曇み晴みしくれ哉」(560)

「初雪を松一村の枯野かな」(561 聯 897)

「山の皆うつりて爰に窓の雪」(562 聯 943「うつる

や爰に」)

「歳暮／春をまで老なおもひそ年のくれ」(566 聯

969)

元禄十七年(宝永元年)に三月十三日改元(一七〇四) 七十七歳

二月二十四日 学堂連歌あり。(宮三⑤)

三月 能順所持の『老葉』の宗祇・宗長注により刷られた

版本『愚句老葉』の序文をなす(天王寺屋版

本)。

三月十二日 能作の子、五千丸、児成の八嶋屋敷あり。(宮三

③)

三月十四日 五千丸、当日の御神供、奉備。預坊より祝辞。

(宮三③)

三月三十日 小松にて山王の祠官章重の連歌に発句を詠む。

の児成の願かなわず、宗祇忌日連歌会のために寄

付をしたのち、五月に小松に下っている。北野の

勤務を離れており、宮仕記録に、能順への連絡の

記述はない。十二月あたりで上京したかどうかも

不明であるが、この時期、江戸で地震と火事が発

生し、静謐の祈禱のため、北野宮仕をあげての千

句連歌張行があり、協力依頼があったかもしれない。

長く京を離れており、個人的なやりとりでの

上京の誘いがあった可能性はある。勿論、決め手

ではないが、配列された三句共、深い雪が間を隔

つ様を詠んだと解せる句でもある。ここでは十六

年のままにしておく。

十二月二十四日 目代友世死去、行年七十九歳。(宮三) 能順、こ

の日以降に発句を詠む。

「友世悼／うらめしなさそひ残して雪の友」(書留

565)

十二月二十六日 能順、宗祇忌日会(毎年七月二十九日)のため、

銀子二百目をこの日以前に年預に寄進。(宮三)

『能順自筆発句書留』に発句 558 ～ 566 あり。

「枯てこそ中／＼霜の花薄」(558 聯 868「枯れにけ

冬

六月二十八日

「三月尽／行や今日いさ桜とて春の風」〔書留580⑦
聯271「三月卅日、小松山王の祠官章重か許にて会
せしに」〕

北野では花の会、当人能作。(宮三③)

能順、半八郎左衛門宛に書簡を送る。序文をなし

た『愚句老葉』に關し、連歌の稽古の書に最適と

賞賛推薦する。(小⑦)

春

「能順自筆発句書留」に発句567～580(568、569取消
句)あり。

「身の春はさもあらはあれ百千鳥」(567 聯25)

「前田知頼兩／梅か香に匂ふや月の夕霞」(570

(改)「月も匂へる夕かな」)

「泉屋二郎兵衛正栄宅にて／なくさむや待心さへ

花の宿」(571 聯148)

「花をそしまかへとてしも春の雪」(572)

「風露の色ふししけし糸桜」(573)

「影そへて花に水せく垣ね哉」(574)

「いつみきとおもひし花の陰もなし」(575 聯162)

「阿部新五兵衛正勝 法名主山□中／散残る別う

らめし花の友」(576 聯218「阿部正勝悼に」)

夏

「長寿尼臨終正念と聞て／うらやまし程経て聞も
花の春」(577)

「花一枝被送たる二／一枝や我に事たる春の花」

(578)

「花を尽し植たる庭にて／名所の有ともいは、家

桜」(579 聯260)

「能順自筆発句書留」に発句581～586あり。

「待事のなき身とはいはし子規」(581 聯355「なき
にしもあらず」)

「おもふ事いつち寝覚の時鳥」(582 聯341)(北畠

宮司家所藏能順画像に貼付の自筆短冊あり⑦)

「森権太夫挨拶迄二／若竹の風ふれまほし老の

袖」(583 聯377)

「松原故鮮二而当座／五月雨は涼しき空を名残

哉」(584 聯385「晴間かな」)

「由比正及嫡子悼／空蟬の羽に置露のうき世哉」

(585)

「残れるやかひ有明の朝涼み」(586 聯452)

能順より能什・能通宛に、能順の京都の家を常久

に譲る旨を知らせる。評議で了承。常久近々引き

七月二十二日

取る予定。(宮三③)

七月二十九日

宗祇忌日の連歌、例年通り学堂にて開催。(宮三③)

③

宗祇忌日に発句を詠む。「祇公正忌日に／朝良や

袖も露けき手向草」(書留592⑦)

八月十五日

能順、名月に発句あり。「名月／又や見んと思ひ

し月の今夜かな」(書留594 聯703⑦③)

九月十三日

能順、歎生宅での九月十三夜の発句に前月十五夜

の発句を転用。「九月十三夜 又此発句二同／又

や見んと思ひし月の今夜かな」(書留595 聯745

「十三夜の月見んとて歎生かたへまかりしに、発

句せよとたれかれいへりければ、去ぬる十五夜に

せし句ながら、いさ、か心もかはり侍るかとて」

⑦③ 宝永二年八月十三日付岡島元為宛能順書簡

で転用の点について言及。

九月十五日以降

今枝戸部直方の江戸往還(宝永元年八月九日～九

月十五日)の際の連歌に点をつけ朱で添削する。

『東北道記』(史 加越能文庫(特1693-013))

『能順自筆発句書留』に発句587～599あり。

「極楽往生ノ心を／行方にさそへ心の空の月」(587

秋

(改)「さそふや心空の月」 聯646 「老の寢覚に／
行かたへさそへこゝろの空の月」

「身を捨て心は月の行ふ哉」(588)

「七夕／梶の葉の露計なる手向哉」(589 聯516)

「秋風に老か身を知一葉かな」(590)

「はかなき事をおもひて／世のうさをなくさむ露

の命哉」(591 聯527)

「野村勘□□妻悼／しほるらん時しも秋の袖の

露」(593)

「西山して云おこせけるに好澄へ遣す／見はや其

西こそ秋の嵯峨の山」(596)

「雨夜／月をこひ音聞明す雨夜哉」(597)

「□もなきおもひや秋のさよ時雨」(598)

「鹿の音や紅葉にまじる山下風」(599 聯572 「山

嵐」)

十月十四日

能順からの能春家伝来の四品を能作が持参、文

庫におさめる。(宮三③ 石歴展40、41、42)

十月二十日

能順書付(↓元禄十六年四月十八日)を能玉(元

禄十五年十二月より元禄十六年十一月まで年預)

が持参。(宮三③)

十月二十六日

能順が、能春家に伝来の什物四品衆中に預けた件を寄合で協議、衆中の什物とし、能春家に器量ある子孫が現れた時には貸すという結論とする。加州の能順には寄合結果を常久より伝える。(宮三)

③

十一月十九日

能作、近日加州に向向、目代に届ける。(宮三) 能作、北国より帰宅、目代に届ける。(宮三)

十二月十六日

「能順自筆発句書留」に発句 600 ~ 606 あり。⑦ 「霜にけさしつまる風の木葉哉」(600) (改) は雪

の高根哉)

「木枯の木の間珍し峰の雪」(601)

「猶の葉は雪待かほの嵐哉」(602) 「猶」は「檐

か)

「踏跡は木の葉に成ぬ今朝の雪」(603)

「またれこし山の端いくへ今朝の雪」(604) 聯 903

「遠山幾重」元禄12年書留443に同一

「梅か香は来ぬ春風の雪間哉」(605)

「岡島喜三郎殿元春悼／晦日／人に今日終れる年

の哀哉 (606) 「

能順発句「いなつまのうつしおけるや露の影」

〔能順画像〕(小) 石歴展76 ②③

宝永二年(一七〇五) 七十八歳

正月一日

能順試筆をしたためる(今朝心しつかに広し四方の春)。『能順発句懐紙』(小C) (書留607 聯

26)

歳旦発句披講随円。(宮三)

一月十三日

公方様(徳川綱吉)御賀の御祈禱連歌あり。(宮

三)

二月二十四日

学堂連歌興行。預坊発句にて面八句に記名。(宮

三)

三月十二日

三月十五日

預能東、七十賀あり。(宮三) 学堂月次連歌あり、宗匠能東。(宮三) 『能順自筆発句書留』に発句 608 ~ 619 あり。

「鶯の隙もとめ来る夜床哉」(608) 聯 94)

「梅に咲霞に匂ふ朝日かな」(609)

「竹田氏忠張死期ニ」よに匂へ我ならてたに宿の

／梅」として野老ニ 申置ければ／消にけり梅を

残して春の雪」(610) 聯 60 「竹田忠張、世に匂へ

我ならてたに窓の梅、といふ句を残して身まかり

某日

給ふ悼⑥

「色みえぬ匂ひは花の心かな」(611 聯154)

「枝はへて匂へる柳桜かな」(612)

「をのつから風待かほの柳哉」(613)

「散すなよ命にむかふ花の風」(614)

「花を送りたる人のもとに／折袖の色香やそへて

八重桜」(615 聯247「或人の女の許より花の枝

に、君かため手折し枝や桜花、といふ匂を添えて

たりし返しに」)

「大森好澄尋来しに／いかに花袖の香ゆかし都

人」(616 聯205「京都大森好澄くたりけるにあひ

て」)

「暮春／年は猶春をそ待し春の暮」(617 聯280「春

こそ待し」)

「高樓にのほりて／爰にみよ四方の山窓花盛」(618

聯185「土方雄忠の庭の高樓にのほりて」)

「ことく／に匂へる花の若葉哉」(619 聯300)

能順、河合三平宛に書状を送る。体調不良、歩行

不能を訴える。(『能順書状幅』石歴蔵 石歴展87)

四月七日

学堂源氏物語講釈、常久により開始される。(宮

三)

学堂前句付あり、点者能東。(宮三)

学堂源氏物語講釈あり。(宮三)

学堂月次連歌あり。(宮三)

学堂前句付あり。(宮三)

天神講会あり、当人上表能順。(宮三)

十七日の学堂の会、本日あり。(宮三)

能順、元禄十五年十二月二十五日寄付の台徳院様

御書と御夢想之詠草に閱して、表具を直したい旨

を申し出、北野側、能作に渡す。石歴展写真で

は、両書の装幀同じ。(宮三 石歴展40、41)

学堂月次連歌あり。(宮三)

『能順自筆発句書留』に発句620～627あり。⑦

小松誓円寺にて月次連歌あり。「古せぬや老の耳

にも子規」(書留620 聯368「誓円寺月次に」)

「とは、いつ寢覚村雨子規」(621 聯343)

「たけ高しいつれ夏草夏木立」(622 聯479)

「刈薦のみたれてみゆる螢哉」(623 聯412「秀右の

許にて三吟」)

「呼たて、うへより々田長鳥」(624 聯371「鳴つれ

四月一日

能順、河合三平宛に書状を送る。体調不良、歩行

不能を訴える。(『能順書状幅』石歴蔵 石歴展87)

て)

「むすふまに月も氷れる清水哉」(625)

「夕立や月にしつまる軒の露」(626) 聯 438 題「白雨」、「ゆふたちは月に鎮まる雲間哉」

「阿弥陀仏の前二面／さそふ風おもへ涼しき道の空」(627) 聯 493 「奉捧南无阿陀仏」「頼めす、しき」

学堂十七日の会あり。(宮三)

七月二十日
学堂にて宗祇公忌日会あり。連衆十五人。(宮三)

七月二十九日
学堂連歌興行。(宮三)

八月四日
学堂前句付あり。(宮三)

八月十三日
岡島元為宛観明軒能順書簡あり。(小7) 昨年の名月の発句「又やみんとおもひし月の今夜哉」に關し、八月十五日、九月十三日の発句として存命の限り使用することを記す。(3)

八月十七日
学堂月次あり。(宮三)

八月二十三日
学堂月次会あり。(宮三)

秋
『能順自筆発句書留』に発句 628 ～ 638 あり。

「みえ初つ今朝風露の秋の色」(628) 聯 521 題「露」

「我心おもへはあたら月夜哉」(629)

「夜よしとも告はや雁に秋の月」(630) 聯 717 「秋の風」

「雁に秋告やる風のたより哉」(631) 聯 724 「都をおもひ出て」

「三宅半夕悼／ましてしはししての山路の月の友」(632) 聯 665 「友の先達ける悼に」

「人の悼 子息もとへ／おもふさへいかに其野の露の袖」(633) 聯 531 「川島正郷母におくれし時」

「上京人ニ／行つれよ都の土産に天津雁」(634)

「寢覚に／月をみて時雨聞夜の寢覚哉」(635) 聯 841

「時雨音きく」

「鴟の鳴梢は秋の枯野哉」(636) 類似句として「鴟啼て秋の木末の夕かな」(聯 795) があり、書留 434 にある。

「しはし秋月にいさよふ雲間かな」(637) 聯 672 「秋しはし」

「秋少残る枯野の薄かな」(638) 聯 584

学堂月次連歌あり。(宮三)

初雪の会あり、当人常能。(宮三)

十一月一日
連歌百韻あり。(宮三)

十二月十日 学堂前句付あり。(宮三)

十二月十七日 学堂月次あり、預坊が勤める。(宮三)

十二月二十一日 節分、上表能順坊当番、観音堂の鑑を遣わす。

(宮三)

冬 『能順自筆発句書留』に発句 639 ~ 646 (642 消去句)

あり。⑦

「時雨すは夜は徒ならん寢覚哉」(639 聯 848) 「しくれすはいたつらならん」

「時雨るなよ起臥苦し老の床」(640 聯 849)

「有明の光を散す紅葉哉」(641)

「戦け猶笹の葉たれの今朝の霜」(643 聯 879) 「竹のはたれの」

「花紅葉皆月雪の光かな」(644 聯 917)

「松風の雪につもれる朝戸かな」(645)

「節分／行と来と年をあらそふ今夜哉」(646 聯 964) 「年のあらそふ」

宝永三年(一七〇六) 七十九歳

二月二十四日 学堂連歌興行。(宮三)

三月十八日 花の会あり。当人能利。七十五日は当月上旬だ

春

春か

七月二十九日

が、能利故障のため延引。(宮三)

歎生、能順、秀右の三吟百韻あり、歎生が発句を詠む。「山深み花に風吹け谷の水」(『新梅の雪』80)、山『連歌集』(1688) 何船百韻(宝永三年(月日は虫損))

「松竹梅の心」を所望され句を送る。「松風や今

一人の朝霞／去年より咲し梅かほる庭／うくひすの我竹垣となれ／て」(『能順連歌幅』(石歴蔵「石歴展86)

能順、宗祇忌日に宗祇独吟の発句「かぎりさへ似

たる花なき桜かな」を思い、手向けの句をなす。「歎生宅」

「言の葉の花には似たるはなもなし」(聯 220)

北野では祇公忌日会学堂においてあり、発句能作。

八月十三日

付句に関する相伝を歎生に伝えるため、『連歌之伝書』を著す。(『連歌之伝書』奥書による史

藤) ③

冬

病床の能順、都を思い発句あり。「なやみおもく成もて来て、今はの折から都の事思ひ出て／九重

に雪の八重山越路かな」(聯95)

十二月二十八日

能順、小松にて没する。(宮三B)

辞世の句「宝永三年丙戌年十一月廿八日の夕、行年七十九にて終に臨る時／彼国にまち迎ふるや花の春」。(聯993)

辞世歌「身のうへにふるはかりにて春秋のいろをもしらす過しつるかは」(『能順画像』(小) 石歴展76②③)

弟子欲生、能順の死に際して発句「有し世に頼し松や雪の底」(『新梅の雫』525(小) 松史資7③)

墓所は小松市西町の誓円寺である。

「北野能順□悼／散はおし常ならぬ世の冬の梅」

(『新梅の雫』561)

十二月四日

京都北野天満宮へ能作から、能順死去の届をなす。(宮三B)

十二月七日

能作、加州へ下向、年預より香典銀子十兩と書付書を預ける。

十二月二十日

能作、加州より上京。

十二月二十二日

北野へ、小松天満宮瑞順より、香奠白銀十兩を納受を知らせる返礼書(十二月十三日付)あり、常

久坊持參。(宮三B)

十二月二十八日

快全、能順追善の独吟百韻を詠む。「月花もなき世に普す今年哉」(小② p25)

宝永四年(一七〇七)

一月二十八日

大森保好、快全と能順追善の賦何人両吟連歌をなす。(『勝着能順大徳月忌連歌』一山『連歌集』(1648)

③)

三月

欲生、能順百ヶ日の追善の発句を詠む。「いつ覚ん過る月日は夢の春」(『新梅の雫』157)

六月二十余日

越前屋欲生、能順の発句をまとめ、宝永頃に刊行。(『聯玉集』序文小) 靈元天皇に上覧、「聯玉集」の名を賜る。

十一月二十八日

欲生、『能順一周忌追善独吟百韻』を詠む。(能快全書留(小)⑤② p28) 「順師忌中／氷るなよ見し人かけの水の月」(『新梅の雫』568⑤)

某年冬

瑞順と能悦により、能順に手向ける両吟二種あり。「生るれば彼国に雪冬もなし」「袖濡す雪はふる世の形見哉」(『能順手向両吟』内小②)

歿生、能順の忌日の追善連歌会にて発句を詠む。

「順師忌日会／学べ人亡世の風の雪の窓」〔『新梅の雫』527⑤〕

正徳二年（一七二二）

十一月二十八日頃 歿生、能順七回忌の追善千句の第十百韻の発句をなす。「順師七廻忌千句第十／雪埋む其跡踏し草の原」〔『新梅の雫』521⑤〕

正徳四年（一七二四）

『聯玉集』の跋文、序文の年次を変え、一句を削り『梅のしづく』として刊行。

享保三年（一七二八）

十一月二十八日頃 歿生、能順十三回忌の追善千句の第十百韻の発句をなす。「順師十三廻忌千句第十／世に光晨明高し峯の雪」〔『新梅の雫』545⑤〕

十一月二十八日 学堂出頭の衆で、能順十三回忌の供養の連歌あり。（宮六）

享保七年（一七三二）

十一月二十八日頃 歿生、能順十七回忌の追善千句の第十百韻の発句をなす。「順師十七回忌千句第十／梅か、の待迎ふるや春の風」〔『新梅の雫』553⑤〕

安政二年（一八五五）

十一月二十八日 能順百五十回忌。能順に「法印権僧都」の位が送られる。北野上乘院において追福百韻張行あり。

③

年時不明の事跡（順不同）

年時不明の事跡のうち、能舜については、この年譜の上で述べたように全てを挙げるものではなく、また『聯玉集』からは能順の居住地、交友関係などがわかる句を挙げるにとどめる。

【能舜】

○能舜参加千句（写・一冊）あり。連衆は願主・長盛・能舜・能札・能長・孝子・能運・宗徳・宗元・玄雪・能作・能柏・正圓・能範・能通。第一百韻発句「梅さきて句ひ外なる□もなし」。（小②）

p22

○光照院殿三十三回忌懷田百韻あり。能舜独吟。「帚木の逢世ならはや老の秋」。(小② p29)

【能順】

○「能順師北山之記」(『歌道聞書』の異本)を写す。奥書は「寛永十九年季春之日」と記載。この時能順は十五歳、史(藤)は、小松梅林院所蔵本を安田龍山が借り出し写した書。奥書の書き方は、能順筆に見える書き方だが、他本から能順の書写奥書はなしとみる。史(藤)本は「就御尋私考」を「能順師北山之記」の後ろに付す。(史(藤)⑤③)

○「就御尋私考」(宗祇「角田川」に關して疑問に答える書)を著す。「能順師北山之記」と合綴(小松梅林院所蔵を安田龍山が借り出して写した書が史(藤)に存する)

○夢想百韻を詠む。連衆は無記・能順。「花なりし鐘を夕の余波哉」(『連歌集』小② p25)、「花になりし鐘を夕の名残哉」(『連歌集』小② p27)

○百韻を詠む。連衆は政右・能順。「谷水を外面にた、く水鶏哉」(小② p25)

○百韻を詠む。連衆は三起・能順。「八重垣の雲か花咲神の庭」(小② p26)

○百韻を詠む。連衆は正的・能順。「梅か香に木立見出る霞哉」(小② p26)

○百韻を詠む。連衆は元流・能順・正供・知由。「植る手に秋風思ふ早苗哉」(小② p26)

○百韻を詠む。連衆は正的・直景・能順。「立すもと雪に思はぬ霞哉」(小④② p26)

○百韻を詠む。連衆は正的・能順・直景・執筆。「何ならぬ老木憐む花の庭」(小④② p26)

○百韻を詠む。連衆は能順・直景・正的・執筆。「霜枯の霜にか、れる草葉哉」(小④② p26)

○何路百韻を詠む。連衆は能順・忠張・元胡・喜悅。「其秋のそれもはかなし夕月夜」(小② p26)

○山何百韻を詠む。連衆は忠張・元胡・能順・喜悅。「声立て昔かたらへ庭の萩」(小② p26)

○玉何百韻(天神八百回忌万句のうち)を詠む。連衆は禾・能順・西洞院・能開ら。「緑立松や一夜の朝霞」(小② p28) ↓天神八百年忌

連歌ゆえ元禄十四年頃か。

○御何百韻を詠む。連衆は、政長・政在・能順・教順・惣代・政

則・政冬・政広・政相・長貞・冬世・清持・真保・執筆。「人心ちらぬや千年国の種」(④「人心ちらぬや千年花の種」)(小④② p29)

○某年五月二十一日に、『日発句』（宗祇の発句の日次編集本）を写す。（小② p30）

○小松天満宮蔵「蛩集記」に、「同（会席稿者注）追加九十条」

（能順作）あり。（小② p30）

○「二十四人連歌仙」を編纂する。（史（藤）⑤）

○某年初めて加賀に下った際に、発句「朝霧やへたて、も又越の海」（聯544③）を詠む。

○三条家より古今伝授を受けるか。（第四代別当由順の五十賀の文書（小堀政布書（小）の記述による③）

○小松にて千句に参加、第一百韻発句を詠む。「小松にての千句巻頭／色よ香よ心にかなふ宿の梅」（聯35）

○前田知頼のもとに祇公筆跡開に発句を詠む。「月花の情や残る筆の跡」（聯165）

○松原一息の許にて祇公筆跡開に発句を詠む。「言の葉のはなに残れる昔かな」（聯196）

○祇公御影開に「言の葉に匂へる花や世々の春」（聯170）

○千句あり。「千句之内／年に待日に待はなの若木かな」（聯172）

○小松養福院祐尚興行百韻の発句を詠む。「夕ぐれの花の所や寺の庭」（聯175）

○玉泉寺南佳上人の隠居にて百韻の発句を詠む。「行とまる宿や彼

国のはなの本」（聯186）

○小松誓円寺にて月次の連歌会始に発句を詠む。「言の葉のはなのたねまけ園の春」（聯221）

○奥村有輝（加賀藩年寄、延宝七年（1679）～享保一五年（1731））の許に招かれ、加州執柄の家をたたえて発句を詠む。「陰高し四方のかさしの家桜」（聯257）

○野村重威宅で、和歌浦を蒔絵で描いた文台開に発句を詠む。「春なれや緑も和歌の浦の松」（聯295）

○政右と両吟で「頃日や誰言種もほと、きす」（聯321）

○「快全法師と両吟／袖毎に世の風にはふあやめ哉」（聯374）

○加州の小松重幸の追悼の発句を詠む。「袖のうへの露に消行はたる哉」（聯414）

○竹森檢校春林の追悼の発句を詠む。「うつせみの世をことほりて啼音哉」（聯419）

○孫娘の出生の祝いの発句を詠む。「撫子のあはれむつまし姫小松」（聯422）

○金沢の常徳寺にて興行。「下水を恥るはちすのうき葉哉」（聯429）

○「勘解由小路三位殿より、片月情千里、といふ句を团扇に御書て下し給ふに／忘れずや風もみなみの都人」（聯507）

○祇公筆跡開に「身こそ露きえぬや其名世々の秋」（聯524）年来の

望みであつた、荒木田守武宛宗祇書状を手に入れ非常に喜び、掛物に仕立て、その旨の覚書をこの句と共に書状に付す。(広島大学文学部所蔵『諸状集』二(松岡久人編)『広島大学所蔵猪熊文書(二)』(昭和58・福武書店)。

○脇田直賢の追善に発句を詠む。「露の世は其言種を名残哉」(聯528)

○本田政長の書院開きの会で発句を詠む。「広くすむ宿にこそ見め秋の月」(聯649)

○松原一息の亭で発句を詠む。「松原一息の亭にて一円相の欲に／雲はれて是やむなしき空の月」(聯655)

○横山正忠の追悼に発句を詠む。「なれも今鳴かりの世の恨みかな」(聯719)

○加州から春林友雪が上京したので発句を詠む。「つれて雁越路かたらふ都かな」(聯720)

○越中高岡から直倫周方が来訪したので発句を詠む。「遠く来て音信うれし天津雁」(聯722)

○佐太八幡宮法楽連歌に永井伊賀守直敬朝臣の代作に発句を詠む。「行ゑ見む根ふかく栽し宿の菊」(聯731)

○北野の閑居を造り住んでいた時、快全・好澄が来訪、三吟に発句を詠む。「色に出てとはる、宿の木末哉」(聯784) ↓ 聯784の詞書と、

書留511、512の詞書⑦より元禄十五年詠か。

○祇公の発句宗長筆跡開に発句を詠む。「霜を経て猶言種の千入哉」(聯793)

○七月九日に津田孟昭の下屋敷の蓮池にて発句を詠む。「秋かけて夏の日永きはちす哉」(聯819) ↓ 書留245⑦より元禄六年詠か。

○本田政敏朝臣の山中の温泉入湯の際に、発句を詠む。「秋さむみ出湯は神の恵み哉」(聯820) 「こかる、やかけも出湯の下もみち」(聯821)

○某年東国下向の際の句。「たつた姫及ぬ色かふしの雪」(聯824)

「松陰や秋なき波の清見潟」(聯825)

○武蔵野にて発句。「武蔵野やふらぬ日あらし村時雨」(聯844)

○横山氏従の追悼の発句を詠む。「残されてぬる、時雨の朽葉かな」(聯855)

○田子の浦にて発句。「木からしの只吹田子の浦の松」(聯866)

○正的、直景と三吟連歌を詠む。連衆——能順・直景・正的・執筆発句(能順)(小)「霜枯の霜にか、れる草葉哉」(聯872)

○奥村有輝の許にて発句を詠む。「見るま、に高く木深し雪の松」(聯927)

○常徳寺賞山法師の追悼に発句を詠む。「無人の身に先暮しことしかな」(聯971)

○小松にての千句巻軸に「榊葉の声さへすむや神慮」(聯992)と詠む。

○江守是屑興行連歌に参加。発句「めぐりあひて見るや都の空の月」(玄陳) (連衆は玄陳・友閑・値存・能順・仍春・正知・玄心・

元流・正的・守治・宗玄・執筆) (向島秀一氏所藏連歌集④)

○何路百韻を詠む。「五月雨は高峯や雲のみをつくし」(発句能順

「寄藻草 能順」金松雲) ⑤

○風早中納言、勘解由小路三位を迎え能順、不清、随恩、能作らで和漢連句「見る人のしげきにとまれ花の宿」張行、能順、第三に出

座。(含連 阪) ⑥

○浅井政右(素庵、元禄四年没)の独吟花千句あり。第一百韻発句「春てふは花の種まく心かな」。能順、この千句の追加八句の発句を

詠む。(7)

○歛生、能順、快全で水辺の月見をし、歛生発句を詠む。「行月のかけ立帰る波も哉」(「新梅の雪」379)

○ある年の仲秋に、能順、発句を詠む。「久方の中なる秋の今夜哉」(「新梅の雪」388)

○能順、百韻を詠む。「青柳の糸よりむすふ霞かな」(仙令) 連衆——仙令・忠張・能順・定政・直信・理章・香鶯・元流・元智・忠

一・執筆(小)

○外宮法楽独吟百韻を詠む。発句「天のとや花よりしらむ神路山」(阪)

○百韻を詠む。発句「植る手に秋風思ふ早苗哉」(元流) 連衆——元流・能順・正供・知由(小)

○百韻を詠む。発句「木枯もよきし紅葉の一木哉」(直方) 連衆

——直方・政右・忠張・直忠・武包・能順・正好・正供・執筆(小)

○百韻を詠む。発句「桜狩木伝ひ暮す山路哉」(能順) 連衆——能

順・其阿・元胡・常以・昌忠・淨円・正勝・直房・無順・覚遊・喜悦・正郷(小)

○独吟百韻を詠む。発句「白露は実夕立の名残哉」(小)

○本田政長、松雲庵能順の求めに応じて『梯天神靈験記』を執筆する。(小(梅林能智写し) 史(加越能文庫))